

東京外国語大学 国際日本学研究所プログラム—文部科学省「国立大学の機能強化」事業—

TUFS Program for Japan Studies in Global Context,
supported by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MEXT)

東京外国語大学 国際日本学研究所 報告 V



東京外国語大学 大学院
国際日本学研究所

Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies

東京外国語大学 国際日本学研究 報告V

木部 暢子 (国立国語研究所) 2016年4月～2018年3月 in TUFS

目次

日本語方言の多様性－アクセントの地域差－	1
日本の危機言語・方言－奄美・沖縄の親族名称・親族呼称－	10
対格標示形式の地域差－無助詞形をめぐって－	20
奄美・沖縄の言語研究から－奄美方言のエビデンシャルティ－	33

日本語方言の多様性—アクセントの地域差—

木部 暢子 (国立国語研究所)

要旨

日本語は、アクセントの地域差が大きいことで知られている。例えば、「雨」は東京方言でアメ (ame), 京都方言でアメー (amee) 鹿児島方言でアメ (ame) と発音され、「飴」は東京方言でアメ (ame), 京都方言でアメ (ame), 鹿児島方言でアメ (ame) と発音される。また、福島方言では「雨」も「飴」も区別がなく、アメ (ame) と発音されたり、アメ (ame) と発音されたりする（上に線を引いた部分を高く、線を引いていない部分を低く発音する）。このようなアクセントの地域差はなぜ生じたのだろうか。各地のアクセントシステムと方言間のアクセント型の対応関係を検討することにより、これらが同一の祖型から生まれた兄弟関係にあることを述べ、これらのバリエーションが生まれたプロセスについて考察する。

キーワード

東京方言, 鹿児島方言, 京都方言, 弘前方言, 下げ核, 昇り核

1 アクセントの地域差の概観

日本語は、アクセントのバリエーションが豊かである。これまでの研究成果からアクセントの地域差を概観してみよう。



図1 杉藤美代子 『日本語アクセントの研究』を参考に作成

図1を見ると、全国は大きく(1)京阪式アクセント、(2)東京式アクセント、(3)二型^{にけい}アクセント、(4)無型^{むけい}アクセントの4つに分けられている。以下では、京都方言（京阪式アクセント）、東京方言、弘前方言（東京式アクセント）、鹿児島方言（二型アクセント）の4方言を取りあげ、まず、それぞれのアクセントシステムを概観し、次に、それらの異同について考察し、最後に、それぞれのアクセントがどのようにして形成されたかについて考える。

2 東京方言のアクセント

最初に東京方言を取りあげる。表1は、東京方言の名詞のアクセント型のリストである（上に線を引いた部分を高く、線を引いていない部分を低く発音する）。

表1 東京方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉: <u>ha</u>	鼻: <u>hana</u>	桜: <u>sakura</u>	友達: <u>tomodati</u>
手: <u>te</u>	雨: <u>ame</u>	兜: <u>kabuto</u>	螻蛄: <u>kamakiri</u>
	花: <u>hana</u>	心: <u>kokoro</u>	色紙: <u>irogami</u>
		男: <u>otoko</u>	雷 : <u>kaminari</u>
			妹 : <u>imooto</u>

表1では、te (手) と ha (葉), hana (花) と hana (鼻), otoko (男) と sakura (桜), imooto (妹) と tomodati (友達) がそれぞれ同じアクセント型になっているが、これらに助詞 ga (が) を付けて発音すると、「手」「花」「男」「妹」には ga (が) が下がって続き、「葉」「鼻」「桜」「友達」には ga (が) が下がらずに続く（表2）。ここから、「手」「花」「男」「妹」の末尾には次に来る助詞を下げるという特徴が備わっている、逆にいうと、「葉」「鼻」「桜」「友達」にはそのような特徴が備わっていないと考えることができる。その他のアクセント型もピッチの下がり目の位置によって区別されている。

表2 東京方言の「名詞+ga」のアクセント

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉: <u>haga</u>	鼻: <u>hanaga</u>	桜: <u>sakuraga</u>	友達: <u>tomodatiga</u>
手: <u>ttega</u>	雨: <u>amega</u>	兜: <u>kabutoga</u>	螻蛄: <u>kamakiriga</u>
	花: <u>hanaga</u>	心: <u>kokoroga</u>	色紙: <u>irogamiga</u>
		男: <u>otokoga</u>	雷 : <u>kaminariga</u>
			妹 : <u>imootoga</u>

一方、ピッチの上がり目は、多くの場合、第2拍目にある（第1拍目のみを高く発音する te (手), ame (雨), kabuto (兜), kamakiri (かまきり) を除く)。このことから、ピッチの上がり目は語のアクセントの区別に関与していないことがわかる。

では、ピッチの上がり目はどのような役割を担っているのだろうか。じつは、ピッチの上がり目は、文節の作り方によって移動することがある。例えば、irogami (色紙) の第2拍目の上昇は、「この色紙」「わたしの色紙」といった連文節では、konoirogami, watasinoirogami のように、「この」「わたしの」の部分に移動する。もし、konoirogami (この色紙), watasinoirogami (わたしの色紙) のように発音したとしたら、「この」と「色紙」、「わたしの」と「色紙」の2つの文節に切れているように感じる。このことから、第2拍目の上昇は単語のアクセントではなく、句 (phrase) の始まりを表していることがわかる。

以上をまとめると、次のようになる。東京方言のアクセント型は、「ピッチの下がり目がどこにあるか (下がり目がない型も含む)」によって区別される。ピッチの上がり目はアクセントの特徴ではなく、句の始まりの特徴である。

ピッチの下がり目を「下げ核」(lowering kernel) という。これを $\bar{\quad}$ で表記すると表3のようになる。

表3 東京方言の名詞のアクセント体系

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
葉:ha	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
手:te $\bar{\quad}$	雨:a $\bar{\quad}$ me	兜:ka $\bar{\quad}$ buto	螻蛄:ka $\bar{\quad}$ makiri
	花:hana $\bar{\quad}$	心:koko $\bar{\quad}$ ro	色紙:iro $\bar{\quad}$ gami
		男:otoko $\bar{\quad}$	雷 :kamina $\bar{\quad}$ ri
			妹 :imooto $\bar{\quad}$

下げ核は単語の特定の拍に付与された特徴で、例えば、「手」「雨」「兜」「かまきり」は第1拍目に下げ核を持つ語、「花」「心」「色紙」は第2拍目に下げ核を持つ語、「男」「雷」「妹」は第3拍目に下げ核を持つ語、また、「葉」「鼻」「桜」「友達」は下げ核を持たない語である。単語のアクセントは下げ核の位置により、次のように数字で表すことができる。

表4 東京方言の名詞のアクセント体系

アクセント	単語	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
0	葉, 鼻, 桜, 友達	○	○○	○○○	○○○○
1	手, 雨, 兜, 螻蛄	○ $\bar{\quad}$	○ $\bar{\quad}$ ○	○ $\bar{\quad}$ ○○	○ $\bar{\quad}$ ○○○
2	花, 心, 色紙		○○ $\bar{\quad}$	○○ $\bar{\quad}$ ○	○○ $\bar{\quad}$ ○○
3	男, 雷			○○○	○○○ $\bar{\quad}$ ○
4	妹				○○○○ $\bar{\quad}$

(下げ核のない型は0で表す)。

下げ核を持たない型を含めて、東京方言ではN拍語につき「N+1」個の型がある。このようなタイプのアクセントを「多型^{たけい}アクセント」という。

3 鹿児島方言のアクセント

次に鹿児島方言を取りあげる。鹿児島方言の名詞のアクセント型は、表5に示すように、A型（うしろから2つ目のシラブルが高く、最後が下がる型）とB型（最終シラブルのみ高い型）の2種類である（韻律の単位は拍ではなく音節（シラブル）である）。

表5 鹿児島方言の名詞のアクセント型

	<1音節>	<2音節>	<3音節>	<4音節>
A型	葉:ha	鼻:hana	女:onago	赤蜻蛉:akatonbo
B型	歯:ha	花:hana	男:otoko	雷:kannaredon

全ての単語は、A型かB型かのどちらかに分類される。ame（飴）、sakura（桜）、tomodat（友達）はA型、te（手）、ame（雨）、kokoro（心）、irogan（色紙）、imot（妹）はB型である（鹿児島方言では、tomodat（友達）のdatやimot（妹）のmotのような閉音節が多数現れる）。

A型、B型の音調パターンは、助詞が続いても変わらない。例えば、名詞にga（が）、mo（も）、kaa（から）、den（でも）等の助詞が続くと、高い部分がうしろに移動して、A型、B型の音調パターンが保たれる（表6。kaa（から）は例外的に2音節を形成する）。

表6 鹿児島方言の「名詞+助詞」のアクセント

	単語	ga（が）	mo（も）	kaa（から）	den（でも）
A型	鼻:hana	鼻:hanaga	鼻も:hanamo	鼻から:hanakaa	鼻でも:hanaden
B型	花:hana	花:hanaga	花も:hanamo	花から:hanakaa	花でも:hanaden

鹿児島方言のように、語の長さにかかわらずアクセント型の種類がN種類と決まっている方言を「N型アクセント」という。鹿児島方言は2種類の型を持つので、二型アクセントである。

鹿児島方言のアクセントと先に述べた東京方言のアクセントを比較してみると、いろいろな点で大きく違っていることがわかる。まず、東京方言のアクセントは、特定の拍に付与された「下げ核」によってアクセント型の区別が行われる。下げ核は固有の拍に付与されたものなので、助詞が接続しても基本的には下げ核の位置が動かない。それに対し、鹿児島方言のアクセントは、句全体にかぶさる音調パターン（A型かB型か）によってアクセント型が区別される「二型アクセント」である。音調パターンは、基本的に句（文節）を単位としているので、助詞が接続して句が長くなると高い部分がうしろに移動する。

次に、東京方言は拍数に応じて型の種類が増えていく「多型アクセント」、それに対し、鹿児島方言は単語の長さにかかわらずアクセント型の種類が2種類と決まっている「二型アクセント」である。

4 京都方言のアクセント

三番目に京都方言を取り上げる。表7は京都方言の名詞のアクセント型のリストである。

表7 京都方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
葉:haa	花:hana	男:otoko	姉:neesan
		二人:hutari	湖:mizuumi
			雷:kaminari
手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninjin
	雨:ame	兜:kabuto	色紙:irogami
		マッチ:matti	息抜き:ikinuki

それぞれの型の区別には、ピッチの下がり目の位置が関与している。ただし、ピッチの下がり目だけで型を区別しようとする、表8に示したように、「二人/兜」、「湖/色紙」（いずれも2）、「雷/息抜き」（いずれも3）、「子/手」、「鼻/松」、「桜/兎」、「友達/人参」（いずれも0）が区別できなくなってしまう。それを回避するためには、もう一つ別の特徴を関与させなければならない。

それぞれのペアを見てみると、左の語（二人、湖、雷、友達、子、鼻、桜、友達）は語の最初から高く発音され、下降の位置まで高が続くのに対し、右の語（兜、色紙、息抜き、手、松、兎、人参）は語の最初が低く発音され、下降の前の拍まで低が続いている。この特徴と下げ核を組み合わせるにより、表8を表9のように改良することができる。

以上から、京都方言のアクセントは、語の特定の拍に付与された「下げ核」と語の始まりがHigh toneかLow toneかという「2つの式」によってアクセント型が区別されると整理することができる。「下げ核」を持つ点は東京方言と共通している。また、「2つの式」を持つ点は鹿児島方言の「二型アクセント」と共通している。つまり、京都方言のアクセントは、東京のシステムと鹿児島システムの組み合わせたような形を持っているのである。

表8 京都方言の名詞の下げ核の位置

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
0*	子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
1	葉:ha [˘] a	花:ha [˘] na	男:o [˘] toko	姉:ne [˘] esan
2**			二人:huta [˘] ri	湖:mizu [˘] umi
3***				雷:kamina [˘] ri
0*	手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninjin
2**		雨:ame [˘]	兜:kabu [˘] to	色紙:iro [˘] gami
3***			マッチ:matti [˘]	息抜き:ikinu [˘] ki

表9 京都方言の名詞のアクセント体系

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
H0	子:koo	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
H1	葉:ha ^ː a	花:ha ^ː na	男:o ^ː toko	姉:ne ^ː esan
H2			二人:huta ^ː ri	湖:mizu ^ː umi
H3				雷:kamina ^ː ri
L0	手:tee	松:matu	兎:usagi	人参:ninzin
L2		雨:ame ^ː	兜:kabu ^ː to	色紙:iro ^ː gami
L3			マッチ:matti ^ː	息抜き:ikinu ^ː ki

(H: High tone で始まる L: Low tone で始まる)

5 弘前方言のアクセント

四番目に弘前方言を取り上げる。弘前方言の名詞のアクセント型を表10に示す。表10では名詞単独形と助詞mo(も)が接続したときのアクセントを上下に並べて示している。

助詞mo(も)が接続した場合に高く発音する部分がうしろに移動する点は、鹿児島方言に似ている。しかし、拍数が増えると型の数が増えていくので、N型アクセントではない。では、アクセント型を区別する特徴は何だろうか。

表10 弘前方言の名詞のアクセント型

<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
手:te	猿:saru	狐:kitune	糠米:urukome
temo	sarumo	kitunemo	urukomemo
	花:hana	兎:usagi	手袋:tebukuro
	hanamo	usagimo	tebukurumo
		男:otoko	果物:kudamono
		otokomo	kudamonomo
			雷:kaminari
			kaminarimo
葉:ha	鼻:hana	桜:sakura	友達:tomodati
hamo	hanamo	sakuramo	tomodatimo

ピッチの下がり目の位置を見ると、多くの文節で最終拍が下がっている。先に見た東京方言では、2拍目からピッチが上昇し、それにより句の始まりを表していた。弘前方言はそれと対称的に、最終拍の前でピッチが下降し、それにより句の終わりを表していると考えられる。だとすると、弘前方言のアクセント型の弁別要素は、ピッチの下がり目ではなく、上がり目である可能性が出てくる。そこで、ピッチの上がり目を「で表記すると、表11のように整理することができる。

表 11 弘前方言の名詞のアクセント体系

アクセント	<1拍>	<2拍>	<3拍>	<4拍>
1	手:「te 「temo	猿:「saru 「sarumo	狐:「kitune 「kitunemo	糠米:「urukome 「urukomemo
2		花:ha「na ha「namo	兎:u「sagi u「sagimo	手袋:te「bukuro te「bukuromo
3			男:oto「ko oto「komo	果物:kuda「mono kuda「monomo
4				雷 :kamina「ri kamina「rimo
0	葉:ha hamo	鼻:hana hanamo	桜:sakura sakuramo	友達:tomodati tomodatimo

ピッチの上がり目（「）を昇り核（ascending kernel）と呼ぶ。「手」「猿」「狐」「糠米」は第1拍目に昇り核を持つ語、「花」「兎」「手袋」は第2拍目に昇り核を持つ語、「男」「果物」は第3拍目に昇り核を持つ語、「雷」は第4拍目に昇り核を持つ語、「葉」「鼻」「桜」「友達」は昇り核を持たない語である。昇り核を持たない語は末尾が上昇するが、これは句（文節）の音調と考えられる。

6 アクセントの地域差の形成

以上、4地点のアクセントシステムの異同を見てきた。これらの異同がどのようにして形成されたのかを考えるために、各地のアクセント型の対応関係を見てみよう。表12を見ると、各地のアクセント型はきれいな対応関係を持っている。このことは、これらのアクセントが共通の祖から生まれた兄弟関係にあることを示している。

表 12 2拍名詞のアクセント型の対応

金田一の類	語	京都	東京	弘前	鹿児島
		式と下げ核	下げ核	昇り核	二型
第1類	飴, 風, 酒, 鼻	H0	0	0	A型
第2類	石, 歌, 音, 橋	H1	2		
第3類	足, 色, 花, 山			2	B型
第4類	稲, 空, 帯, 箸	L0	1		
第5類	秋, 猿, 雨・窓	L1		2(第2拍広母音) 1(第2拍狭母音)	

日本語諸方言の祖型は、鹿児島方言のA型・B型、京都方言の「2つの式」、および東京方言の「下げ核」、弘前方言の「昇り核」が生み出せるような体系を持っていたはずである。そこで、図2では「2種類の式」と「2種類の核」を持つ体系を祖体系として設定している。このうち、2種類の式を保持し、核の種類が「下げ核」に統合されたのが京都方言、式の特徴を保持せず、核の種類が「下げ核」に統合されたのが東京方言、「昇り核」に統

合されたのが弘前方言，2種類の式を保持し，核の特徴を保持していないのが鹿児島方言である。なお，東京方言のアクセントは京都方言のアクセントから変化した体系であることが金田一（1954）等により明らかにされている。

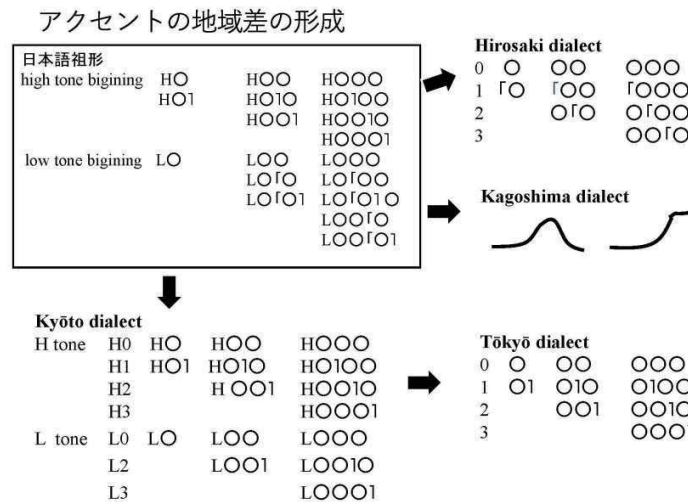


図2 アクセントの地域差の形成に関する試案

琉球諸方言のアクセントについては，近年，調査と研究が急速に進みつつある。多くの地域で3型アクセント体系，2型アクセント体系が報告されているが，与論方言のように昇り核による多型アクセント体系も見つかっており，琉球祖語のアクセントがどのような体系であったかは，今後の調査研究にまつところが大きい。本土諸方言との関係については，金田一の類の2拍名詞1・2類語において，平安京都語や本土の外輪方言と琉球諸方言との間にきれいな対応関係が見られることから，本土諸方言と琉球諸方言が共通の祖（日流祖語）にさかのぼることは間違いない。ただし，詳細については，やはり今後の調査研究にまつところが大きい。

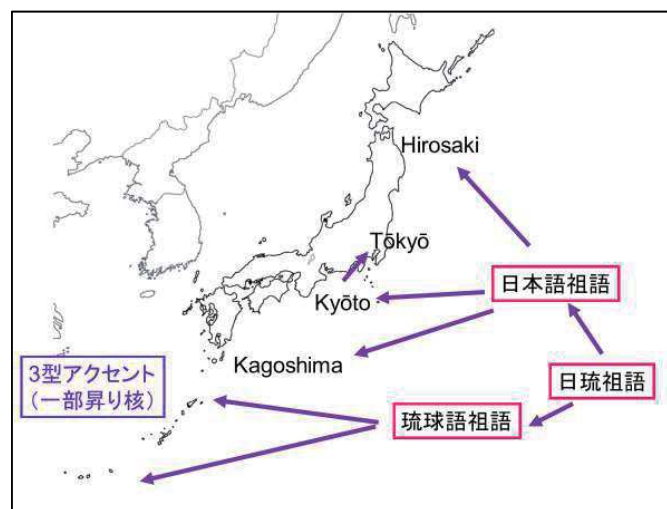


図3 祖語のアクセントに関するイメージ

参考文献

- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』pp. 281-321, 岩波書店.
- 上野善道(1989b)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2』pp178-205, 明治書院.
- 上野善道(2003)「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音韻・音声』, pp. 61-84, 朝倉書店.
- 川上 葵(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.
- 木部暢子(2002)「方言のアクセント」『朝倉日本語講座10 方言』pp. 50-67, 朝倉書店.
- 木部暢子(2010)「方言アクセントの誕生」, 『国立国語研究所プロジェクトレビュー』2, pp. 23-35, 国立国語研究所.
- 小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄(2008)『方言の形成』, 222pp, 岩波書店.
- 金田一春彦(1954)「東西両アクセントの違いが出来るまで」『文学』22-8, pp. 63-84.
- 金田一春彦監修 秋永一枝編(2013)『新明解アクセント辞典』, 三省堂.
- 小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄, 2008, 『方言の形成』, 222pp, 東京: 岩波書店.
- 杉藤美代子(1982)『日本語アクセントの研究』三省堂.
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店.
- 平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』学界之指針社.
- 和田 実(1962)「アクセント」『方言学概説』pp. 162-208, 武蔵野書院.

付記

本稿は、2015年1月30・31日に開催された東京外国語大学大学院国際日本研究院主催の国際シンポジウム「国際日本研究—対話・交流・ダイナミクス」で発表した内容に修正を加えたものである。

日本の危機言語・方言 －奄美・沖縄の親族名称・親族呼称－

木部 暢子 (国立国語研究所)

要旨

危機言語・方言を保存・継承することの意義を、危機言語・方言が持つ言語の仕組みの点から考えることを目的として、第2節で鹿児島県喜界島方言の「母」「祖母」等の親族名称を取り上げ、日本語では鈴木(1973)の「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールが働いているが、喜界島方言では家族構成が変化しても親族名称が変化しない固有名詞的なルールが働いていること、第3節で沖縄県与那国方言の「兄」「姉」の呼称を取り上げ、与那国方言には「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」の3つの枠組みに基づき呼称が構成されていること、すぐ上の兄・姉を呼ぶ名称が存在する点に特徴があることを述べる。

キーワード

喜界島方言, 与那国方言, 親族名称, 親族呼称

1 危機言語とは

2009年2月、ユネスコは“*Atlas of the World's Languages in Danger*” (世界消滅危機言語地図)を発表した。2009年2月20日の朝日新聞夕刊によると、その内容は次のようなものである。

【パリ＝国末憲人】世界で約2500の言語が消滅の危機にさらされているとの調査結果を、国連教育科学文化機関（ユネスコ、本部パリ）が19日発表した。日本では、アイヌ語が最も危険な状態にある言語と分類されたほか、八丈島や南西諸島の各方言も独立の言語と見なされ、計8言語がリストに加えられた。（中略）

日本では、アイヌ語について話し手が15人とされ、「極めて深刻」と評価された。（中略）このほか沖縄県の八重山語、与那国語が「重大な危険」に、沖縄語、国頭（くにがみ）語、宮古語、鹿児島県・奄美諸島の奄美語、東京都・八丈島などの八丈語が「危険」と分類された。ユネスコの担当者は「これらの言語が日本で方言として扱われているのは認識しているが、国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当と考えた」と話した。



図1 Atlas of the World's Languages in Danger

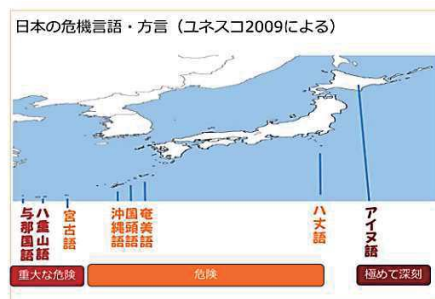


図2 日本の危機言語

図1はユネスコのホームページ (<http://www.unesco.org/languages/atlas/index.php>) から引用した2,500地点の危機言語の地図、図2はそれを元にして作成した日本の8つの危機言語の地図である。この発表のあと、私のところには次のような意見が寄せられた。

1. 八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語は、「～語」というよりも「～方言」ではないのか？
2. 危機の度合の判定はどのようにして行われたのか。
3. 日本には、他に消滅の危機にあることばはないのか？
4. マイナー言語が消滅するのは時代の流れであって、しかたがない。危機言語・方言を守る意義は何なのか。

1については、2つの言葉に相互理解が成り立つかどうか、という規準で論じられることが多い。たとえば、Aの言葉の話者とBの言葉の話者がお互いに相手の言葉を聞いて、発話内容が相互に理解できれば両者の関係は「方言」、理解できなければ異なる「言語」というものである (Chambers, J. K. and P. Trudgill 1980)。ただし、相互理解が成り立っても、その2つの言葉が別の国家に属していれば、2つの言葉を「方言」と呼ぶことはできない。また、2つの言葉のうち一方が社会的、経済的に有力な地域の言葉の場合、もう一方はその言葉を理解することができるが、その逆は少ない (たとえば、青森の人は東京の言葉を理解することができるが、東京の人は青森の言葉を理解することができない)。さらに、離れた2地点を比較したときには相互理解は成り立たないが、2地点の間に分布する言葉を介して、両者が「方言」の関係にあると判断される場合もある。たとえば、青森と東京とでは相互理解が成り立たないが、青森と岩手、岩手と宮城、宮城と福島・・・というように、相互理解が成り立つ言葉が連続的に分布することにより、両者が方言の関係にあるという考え方である (図3)。



図3 連続する方言の分布

結局、「言語」か「方言」かにはさまざまな要因が関係していて、一概に決めることはできないというのが結論である。また、言語学的には「言語」と「方言」を区別することに大きな意味があるとは思えない。それよりも、調査者は、その言葉を話す人の立場に立って調査・研究・言語復興支援を行うことの方が重要である。与論民俗村 (鹿児島県与論島) の菊秀史氏の次のような発言は示唆的である。「私たちにとって、言語も方言も関係ありません。あるのはユンヌフトゥバ (与論のことば) だけです」(2015年 危機的な状況にある言語・方言サミット (沖縄) における発言)。

2と3については、文化庁委託事業報告書(2011～2015)や木部 (2013), 木部 (2018) に詳しく書いたので、それを参照していただきたい。

4の「マイナー言語が消滅するのは時代の流れ」というのは、対応が難しい質問である。実際、言語は変化しながら現在に至っている。変化の中には消滅も含まれる。なぜ、今、危機言語・方言を守る必要があるのか。それに対する明確な答えを出さなければ、ユネス

この発表も効果を発しない。これに関してよく言われるのは、次のようなことである。

- (1) 言語は地域の環境や文化・社会の中で、長い年月をかけて作られてきた。それが消滅すれば、昔からの地域文化のあり方に触れる手がかりを無くしてしまうことになる。
- (2) 言語はアイデンティティ（自分が自分であること）の象徴である。生まれた土地を離れても、言語によって自分のアイデンティティを確認することができる。
- (3) 言語には、コミュニケーションツールとしての役割と知識や思考、感情・感性の基盤としての役割がある。後者によって、人は世界を認識し、さまざまな思考を行い、感情や感性を働かせている。その仕組みの多くは、まだ解明されていない。もし、言語の多様性が失われれば、言語の仕組みや思考・感情の仕組みを解明する手がかりの多くがなくなってしまう。

(1)、(2)は比較的分かりやすいが、(3)はもう少し説明が必要かもしれない。以下の節では、言語の多様性が人々の考え方とどう結びついているかの例をいくつかあげてみよう。取り上げるのは、奄美、沖縄の親族名称、呼称である。

2 鹿児島県喜界島方言の「お母さん」と「お婆さん」

奄美方言では、「お母さん」のことをアンマーといい、「お父さん」のことをジューという。奄美の最も有名な民謡の一つ、「行きゅんにや加那」に次のような歌詞がある。一番は、愛しい人との別れを唄った内容で、唄の題名もそこから来ているが、それに続く歌詞では、アンマとジューが唄われている。

行きゅんにや加那
吾が事忘れて
行きゅんにや加那
うっ立ちやうっ立ちやが
行き苦しや

行ってしまうのですか。加那（愛しい人）よ。
私のことなど忘れて
行ってしまうのですか。愛しい人よ。
発とう、発とうとするのですが、
行くのが苦しくてなりません。

あんまとうじゅう
長生きしんしょれい
あんまとうじゅう
米とうてい豆とうてい
召上らしゅんど

お母さんとお父さん、
長生きしてください。
お母さんとお父さん。
（私が働いて）米を取って豆を取って
食べさせて差し上げますから。

ところが、2010年に奄美の喜界島で調査をしたときに、島北部の小野津集落でアンマが「お母さん」ではなく「お婆さん」を表すと聞かされた。別の集落へ行くと、今度はアンマは「お母さん」のことだと言う。どうも、喜界島の中で「お母さん」のアンマと「お婆さん」のアンマが混在しているようである。それを示したのが表1である。

表1 喜界島諸方言の「お母さん」と「お婆さん」

地域	「お母さん」	「お婆さん」
小野津 (おのつ)	オッカー	アンマー
志戸桶 (しどおけ)	オッカー	アンマー
中里 (なかざと)	オツカン	アンマー～アニー
中里	アンマー	アニー
荒木 (あらき)	オツカン	アンマー
荒木	アンマー～オツカン	アンマー～アニー
上嘉鉄 (かみかてつ)	オッカー	アンマー
上嘉鉄	アンマー	アニー

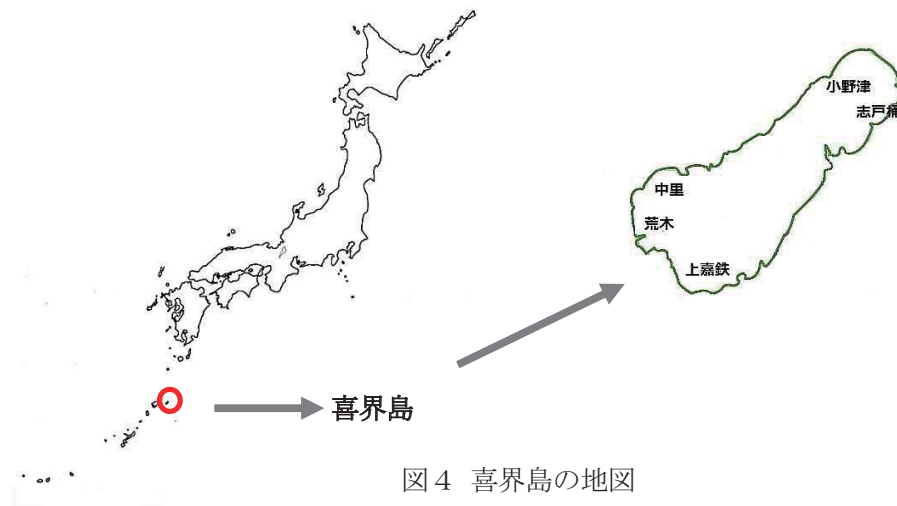


図4 喜界島の地図

表1を見ると、北部の小野津や志戸桶ではアンマーが「お婆さん」の意味で使われ、南部の中里や荒木、上嘉鉄ではアンマーが「お母さん」を指したり「お婆さん」を指したりする。「お母さん」がアンマー～オツカン、「お婆さん」がアニー～アンマーのように揺れることもある。揺れの中に出てくるオツカンは、鹿児島県本土で広く「お母さん」の意味で使われることは、アニーは「姉」に由来し、徳之島ではアンネー、アの形で「お婆さん」の意味で使われる。おそらく、古くは「お母さん」をアンマー、「お婆さん」をアニーと言っていたが、新しく「お母さん」の意味のオツカンが鹿児島から入ってきたために、アンマーが「お婆さん」の意味にスライドしたのではないかと思われる（図5）。

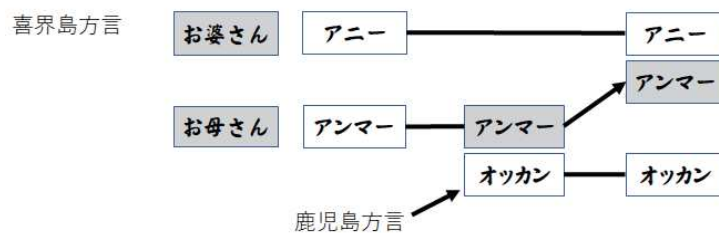


図5 喜界島方言の「お母さん」「お婆さん」の変遷

親族名称が外から入ってきた新しいことばに取って代わられるのはよくあることで、日本でも江戸時代、江戸の中層階級以上の子は父親をオトツァン、母親をオッカサンと言い、庶民の子は父親をチャン、母親をオッカアと言った(『守貞漫稿』1837~1867)。明治時代になると学校教育の影響でオトーサン、オカーサンになり、1945年以降は英語の影響でパパ、ママになった。ただ、日本語では新しい語形を受け入れたときに、元からのオッカアやオカーサンが「お婆さん」の意味にスライドするようなことがない。この違いはどこから来るのだろうか。それは、日本語には鈴木孝夫(1973)のいう「親族名称の虚構的用法の第二種」があるためだと思われる。

「親族名称の虚構的用法の第二種」とは、「家族の最年少者を規準にとり、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、すべてこの最年少者から見て、なんであるかを表わす用語で示される」(鈴木1973:172)というルールである。たとえば、夫が妻をオカーサンと言ったり、自分の母親をオーバーチャンと言ったりするのは、家族の最年少者=子どもに心理的に同調して、子どもが使う用語を使うためである(図6。実線が実質的な用法、点線が虚構的用法)。新たに赤ん坊が生まれたときには、一時的に〈二人オカーサン状態〉が生じるが、このような状態は、「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールにしたがって、元からの母親(赤ん坊から見て祖母)をオーバーチャンと呼ぶことによりやがて解消されていく(図7)。これに対し、喜界島方言では〈二人アンマー状態〉が生じたときに、鹿児島本土から取り入れたオッカアが母親の位置に座り、元からの母親(赤ん坊から見て祖母)のアンマーが残った(図8)。このことは、喜界島方言には「親族名称の虚構的用法の第二種」ではなく、別のルールが働いていることを示唆している。それはどのようなルールなのか。

じつは、喜界島方言では「母」と「祖母」だけでなく、「父」と「祖父」、「兄」と「夫」と「父」、「姉」と「母」も同じ語で呼ばれる。『喜界島方言集』(1941)には次のような記述がある。

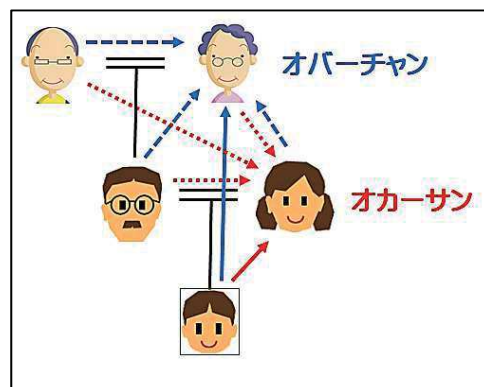


図6 親族名称の虚構的用法の第二種
(鈴木1973を元に作成)

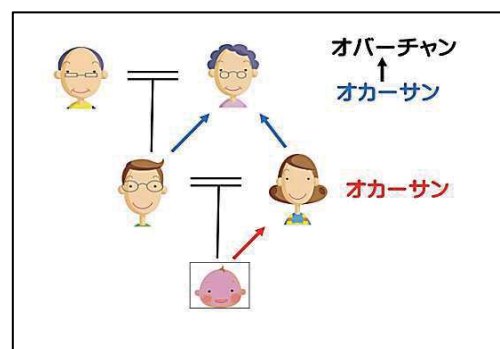


図7 二人オカーサン状態

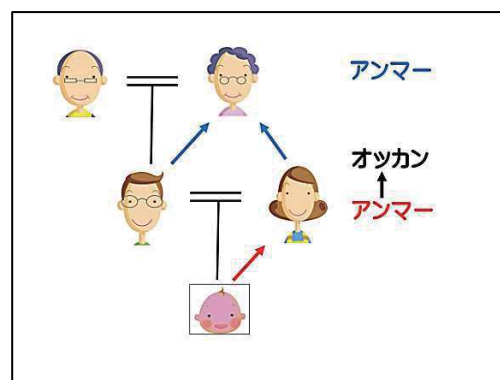


図8 二人アンマー状態

- アンマー 母。家に依っては若い母をイナンマーと呼び、祖母をアンマーと呼ぶ。
 アチャー 父。又家庭に依っては若い祖父をかく呼ぶことがある。
 ヤッキー 兄。若い夫婦間では妻が夫を呼ぶにも用い、又若い父を子どもが斯く呼ぶ事も多い。
 イナンマー、インマー（浦） 姉。また年下の者が中年までの女を呼ぶ場合にも用いる。家庭によっては若い母をその子達が斯く呼ぶ。

2012年の国立国語研究所の調査では、これらの語が集落によって意味を異にしながら以下のように分布している。

- アチャー 「父」の意味。小野津, 志戸桶, 塩道, 上嘉鉄
 「祖父」の意味。坂嶺, 中里
 ヤッキー (jakkē:, jakki:) 「父」の意味。志戸桶, 塩道, 阿伝, 湾, 中里
 「兄」の意味。小野津, 坂嶺, 阿伝, 上嘉鉄, 荒木
 イナンマー 「姉」 阿伝 (古)

このうち、アチャーに関してはアンマーと並行的な変化が考えられるが、ヤッキーが「兄」と「夫」と「父」を表し、イナンマーが「姉」と「母」を表すのはどういうメカニズムなのだろうか。

まず、ヤッキーは『沖縄語辞典』に「jaQcii 兄。にいさん。士族についていう。」とあることから、もとは「兄」を表していたと考えられる。それが「兄」から「夫」へ、「夫」から「父」へと意味をスライドさせていったわけだが、その背景には、男性の年長者を〇〇ヤッキー（〇〇には名前の最初の2音が入る）と呼ぶ習慣の存在があったと思われる。昔は、集落内の幼なじみ同士で結婚することが普通だった。〇〇ヤッキーと呼んでいた相手がある日、夫になる。そのときに、結婚前の呼び名が結婚後もそのまま使われるということは、容易に推測できる。また、子どもが生まれたときに、その子どもが母親のことばをまねて、父親をヤッキーと呼ぶようになったということも、容易に推測できる。そうやってヤッキーが「父」の意味になったのであろう（図9）。

ここで重要なのは、似たようなことはどの地域でも起こりうるが、日本語では「兄」を表す語が意味をスライドさせて「夫」や「父」を表す語として定着することがないという点である（図10）。日本語には「親族名称の虚構的用法の第二種」のルールが働いているので、最年少者が変わるたびにその人の呼称が ニーサン>アナタ>オトーサン>オジーサ

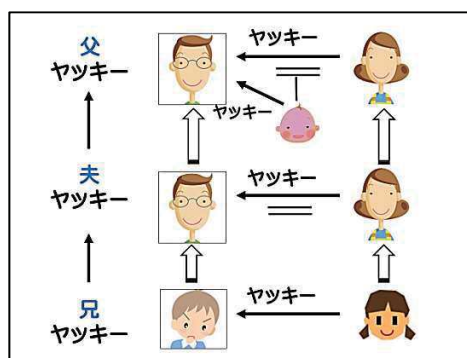


図9 喜界島方言のヤッキー

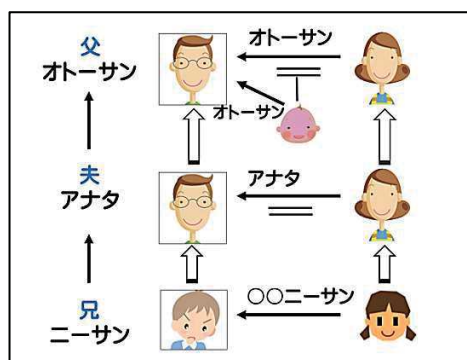


図10 日本語の呼称

ンのように変わっていく。それに対し、喜界島方言では最初の名称が固有名詞のようにその人に張り付き、家族構成が変わってもそれが変わらない。このようなシステムが奄美・沖縄に一般的なのか、日本語諸方言の中にこのようなシステムを持つ方言がないのか、日琉祖語のシステムはどうだったのかなどは、これからの課題である。

3 沖縄県与那国方言の「お兄さん」と「お姉さん」

次に、兄と姉の呼称を見てみよう。標準語では、オニーサン・オニーチャン、オネーサン・オネーチャンで、次男が呼んでも三男が呼んでも、妹が呼んでも弟が呼んでも変わらない。ところが、沖縄県与那国方言では、誰が呼ぶかによって呼び方が異なる。

長男を 次男が呼ぶとき スナティ
 三男以下が呼ぶとき ウブダ
 すぐ下の妹が呼ぶとき ビヤティ
 その下の妹が呼ぶとき ウビヤ
 長女を 次女が呼ぶとき・すぐ下の弟が呼ぶとき アティ
 三女以下が呼ぶとき・その下の弟が呼ぶとき ウバニ

池間苗氏の『与那国ことば辞典』と『与那国語辞典』を参考にして兄・姉の呼び方をまとめると、次のようになる。

表2 与那国方言の兄の呼称

	弟から		妹から	
長男	ウブダ	すぐ上の兄は スナティ	ウビヤ	すぐ上の兄は ビヤティ
次男	ナグダ		ナガビヤ	
三男	ナグダティ		ナガビヤティ	
四男	ウブスナティ		ウブビヤティ	

表3 与那国方言の姉の呼称

	弟・妹から	
長女	ウバニ	すぐ上の姉は アティ
次女	ナカ° ニ	
三女	ナカ° ニティ	
四女	ウブアティ	

(カ° は鼻濁音を表す)

ポイントは3つである。一つめは、長男・長女、次男・次女、三男・三女……に固有の呼称があること、二つめは、男が男の兄弟（兄）を呼ぶときと、女が男の兄弟（兄）を呼ぶときとで異なる語形が使われること、三つめは、長男、次男……を表す語とは別に、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語があることである。

まず、長男・長女、次男・次女、三男・三女……の呼称について。表2を見ると、それぞれは次のような形態素の組み合わせで出来ている。

表4 与那国方言の兄・姉の呼称の語構成

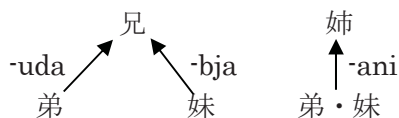
	語根	男 (兄←弟)	男 (兄←妹)	女 (姉←弟・妹)
1 番目	ubu-	-uda ウブダ	-bja ウビヤ	-ani ウバニ
2 番目	naga-	-uda ナグダ	-bja ナガビヤ	-ani ナガニ
3 番目	naga-	-uda+ti ナグダティ	-bja+ti ナガビヤティ	-ani+ti ナガニティ

表4を横に見ると、1番目(長男, 長女)に共通する語根は **ubu-**、2番目(次男, 次女)、3番目(三男, 三女)に共通する語根は **naga-**である(表3では、次女、三女の呼称に鼻濁音の **カ°** が使われているが、これは後接する **-ani** の **n** の影響で語根 **naga-**が **naja-**に変化したものと考えられる)。**ubu-**はウブカディ(台風)、ウブキ(大樹)、ウブクイ(大声)などのウブと同じで「大きい」の意、**naga-**は「中」の意を表す。

次に、表4を縦に見ると、弟から見て兄を表す語に共通に現れる接辞は **-uda**、妹から見て兄を表す語に共通に現れる接辞は **-bja**、姉を表す語に共通に現れる接辞は **-ani** で、三男、三女の呼称には、それに **-ti** が付いている。**-uda** は「年上」を表す **suda** に由来するのではないかと思われる。**-bja** についてはよく分からないが、柴田(1988)によると、「男」を表す「ビンガ」の「ビ」に「父親」を表す「イヤ」が付いたものではないかという。**-ani** は「姉」、**-ti** は指小辞「ちゃん」に当たる語である。

以上を組み合わせると、長男・長女は「大きい兄さん」「大きい姉さん」、次男・次女は「中の兄さん」「中の姉さん」、三男・三女は「小さい兄ちゃん」「小さい姉ちゃん」のような意味になる。これは、それほど珍しい呼称というわけではない。

日本語と大きく異なるのは、男の兄弟(兄)を弟が呼ぶときと妹が呼ぶときとで異なる語形を使う点である。姉を呼ぶときには、弟も妹も **-ani** (姉) を使っているので、異性間の呼称の問題というよりも、妹が兄を呼ぶときに限り、特別な呼称が存在するというのが与那国方言の特異な点である。



このときに使われる接辞 **-bja** は、上述のように、由来がまだよく分からない。ただ、「妹→兄」の呼称を特別な形式で表現しなければならないような文化的、社会的、歴史的必然性があったことは事実である。これについては、多方面からのアプローチが必要なので、ここではこれ以上述べないが、ことばの構造面からみると、与那国方言には「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」の3つの枠組みが設定されているということを指摘しておく。

さらに日本語と異なる点は、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語が特別に存在している点である。この節の最初に「次男が長男を呼ぶとき」にスナティを使い、「すぐ下の妹が長男を呼ぶとき」にビヤティを使い、「次女が長女を呼ぶとき」や「すぐ下の弟が長女を呼ぶとき」にアティを使うと書いたが、これらはいずれも、すぐ上の関係にある兄弟を呼ぶときの呼称である。スナティ、ビヤティ、アティに共通する接辞ティは、三男、三女の呼称に付く接辞の **-ti** と同じもので、指小辞「ちゃん」に当たる語である。その前の部分のスナは **suda** (年上)、ビヤは由来が分からないが、妹が兄を呼ぶときの接辞 **-bja** と同じもの、アは **ani** (姉) だと考えられる。やはり、「弟→兄」「妹→兄」「弟・妹→姉」という3つの枠組みを基盤に

しつつ、長男・長女，次男・次女，三男・三女……とは別に、すぐ上の兄・姉を呼ぶ語が設定されている。このような枠組みを必要とする文化的，社会的，歴史的背景があったものと思われる。

残ったのが，四男・四女のウブスナティ（弟→兄），ウブビヤティ（妹→兄），ウブアティ（弟・妹→姉）である。これらは次のように分析することができる。

ウブスナティ：ウブ（大きい）＋スナティ（弟から見てすぐ上の兄）
 ウブビヤティ：ウブ（大きい）＋ビヤティ（妹から見てすぐ上の兄）
 ウブアティ：ウブ（大きい）＋アティ（すぐ上の姉）

家族の中でもずっと年下の四男・四女にウブ（大きい）や「すぐ上の兄・姉」を表す形式が組み込まれているのは不思議である。これは，どのような命名法に基づくものなのだろうか。おそらく、「すぐ上の兄・姉」を表す形式が含まれているということは，逆にいうと，「すぐ下」が想定されているのではないかと思われる。四男・四女に対してスナティ，ビヤティ，アティが使えるのは，そのすぐ下の五男，五女である^注。ただし，ウブ（大きい）という形態素が付いているので，それよりもさらにさらに下，つまり，六男，六女を想定した命名法ということになる。

（四男・四女　ウブスナティ，ウブビヤティ，ウブアティ
 （五男，五女　スナティ，ビヤティ，アティ
 （六男，六女

ただし，四男・四女が生まれた段階では，まだ六男，六女が生まれていない（生まれるかどうかはわからない）ので，あくまで「六男，六女がいればそう呼ぶであろう」という想定のもとに成り立つ命名法である。もし，このような推測が正しいとすれば，与那国方言には，前節で取り上げた鈴木（1973）の「親族名称の虚構的用法の第二種」（家族の最年少者を規準にとり，呼びかけられる人あるいは言及される人物が，すべてこの最年少者から見て，なんであるかを表わす用語で示される）の原理が適用されていることになる。ただし，本当に「親族名称の虚構的用法の第二種」の原理が与那国方言に存在するのかどうかは今後の調査にまたなければならない。

注

同性同士の兄弟ならば，「四男・四女にスナティ，ビヤティ，アティが使えるのは，そのすぐ下の五男，五女である」と言えるが，異性同士の兄弟の場合は，必ずしもそうは言えない。たとえば，「男1，男2，男3，男4，女1」のような兄弟で男4にビヤティを使うのは女1であり，四女ではない。また，「女1，女2，女3，女4，男1」のような兄弟で女4にアティを使うのは男1であり，四男ではない。ここでは議論を単純化するために，同性同士の兄弟に限定して説明を行なっている。

引用文献

- 間苗著, 池間龍一・池間龍三編 (1998) 『与那国ことば辞典』 私家版
- 池間苗著, 池間龍一・池間龍三編 (2003) 『与那国語辞典』 私家版
- 岩倉市郎著・柳田国男編 (1941) 『喜界島方言集』 中央公論社 (国書刊行会一九七七の復刻による)
- 木部暢子他 (2011) 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書」 国立国語研究所
- 木部暢子 (2013) 『じゃっで方言なおもしとか』 岩波書店
- 木部暢子 (2014) 「奄美喜界島方言の親族語彙—お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん—」 『国語研プロジェクトレビュー』 5(2), pp.57-67
- 木部暢子 (2018) 「消えゆく言語・方言を守るには」 『國學院雑誌』 第119巻第11号
- 国立国語研究所編 (1963) 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- トマ ペラール (2013) 「日本列島の言語の多様性」 田窪行則編『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』 くろしお出版
- 柴田武 (1988) 「与那国方言における兄弟姉妹の呼称」 『語彙論の方法』 三省堂, pp.299-307
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波新書
- 中本正智 (1983) 『琉球語彙史の研究』 三一書房
- 文化庁 (2015~2017) 危機的な状況にある言語・方言サミット
(http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/index.html)
- 文化庁委託事業 (2011~2015) 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究及び危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究
(http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittai_chosa/index.html)
- Chambers, J. K. and P. Trudgill (1980) *Dialectology*. Cambridge University Press.

付記

本稿は、2016年2月2日に行なったCAAS&NINJALユニット合同セミナーでの講義の内容に修正を加えて作成したものである。この研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。

対格標示形式の地域差 –無助詞形をめぐる–

木部 暢子 (国立国語研究所)

要旨

対格標示形式は、地域によって大きく異なっている。東北地方では無助詞形が基本、南九州地方では助詞「オ」や「バ」で標示されるのが基本、その間の地域は、無助詞形と助詞形の両方で標示される。本稿では、現在、国立国語研究所が作成中の『日本語諸方言コーパス』(COJADS)から、青森県弘前市方言(無助詞形主流)、福岡県北九州市方言(助詞形・無助詞形両存)、鹿児島県頴娃町方言(助詞形主流)を取り上げ、弘前市方言では無助詞形が基本だが、対格名詞句が人名詞の場合、特定性を持つ場合、動詞に隣接しない場合に助詞「ゴド」が使用されること、北九州市方言では無助詞形と助詞「オ」が相半ばして現れ、対格名詞句が特定性を持つ場合、動詞に隣接しない場合、焦点化されている場合に助詞「オ」が使用されること、鹿児島県頴娃町方言では助詞「オ」「オバ」で標示されるのが基本で、無助詞形が極めて希であることを述べる。

キーワード

弘前市方言、北九州市方言、頴娃町方言、日本語諸方言コーパス、有生性、特定性、動詞との隣接性

1. はじめに

日本語標準語は「主格-対格型」言語で、自動詞・他動詞の主格標識に「が」を、対格標識に「を」を使用する。しかし、話し言葉では無助詞で格を表示することがある。

- (1) a 太郎は 本を 読んでいるよ。
- b 太郎 本 読んではよ。

日本語諸方言では、主格、対格の標示形式に地域差がある。現在、国立国語研究所が作成中の『日本語諸方言コーパス』(COJADS)を利用して対格助詞の地域差を概観すると、以下のとおりである。

対格助詞の地域差

1. 弘前市方言では、主格、対格ともに無助詞で対格を標示するのが基本である。
2. 広島市、鹿児島県頴娃町方言では、主格を「ガ」、対格を「オ」で標示するのが基本である。
3. 東京方言や福岡県北九州市方言では、主格・対格を「ガ」「オ」で標示する場合と無助詞形で標示する場合とがある。
4. COJADS で対格名詞句の格標示形式を検索し、無助詞形の出現度の高い順に地点を並べると、次のようになる。

弘前 > 羽咋・大阪・北九州 > 東京 > 広島 > 鹿児島

以下では、弘前市方言（無助詞形主流）、北九州市方言（助詞形・無助詞形両存）、鹿児島方言（助詞形主流）を取り上げ、各地点における無助詞形の役割について検討する。

2. 先行研究

これまで対格名詞句が無助詞形で標示される要因として、次のようなものがあげられている。

- (a) 有生性（皆島 1993, 日高 2000, 玉懸 2002, 竹内・松丸 2015）：対格名詞句の名詞が有生名詞の場合は助詞で標示されやすく、無生名詞の場合は無助詞形で標示されやすい。例：「きみを見たら」「おみこしのかつぎますか」
- (b) 特定性（玉懸 2002）：仙台市方言の「ドゴ」は有生かつ特定（specificity）の対格名詞句に対して使用される。例：「ヒトゴド バガヌ スナ（人を馬鹿にするな）」「アノ 犬ドゴ ツカメアデ（あの犬を捕まえてくれ）」
- (c) 代名詞（松田 2000, 阿部 2000）：代名詞は語彙名詞に比べて無助詞形になりにくい。疑問代名詞は逆に、語彙名詞に比べて無助詞形になりやすい。「あれを電車へこう落としてさ」「旗の振ってさ」「なにのやるのかなあ」 地域によっては代名詞の方が語彙名詞よりも無助詞形になりやすい地域もある。
- (d) 動詞と対格名詞句との隣接性（松田 2000, 阿部 2009）：対格名詞句と動詞が隣接している場合は無助詞形が出現しやすく、非隣接の場合は助詞が出現しやすい。例：「仏様 の 拝んで（隣接）」「それを人にしゃべって・・・（非隣接）」

対格標示形式の地域差を示したものに国立国語研究所『方言文法全国地図』がある。図1は、『方言文法全国地図』第6図「酒[を]（飲む）」（対格名詞が非人名詞）、図2は第7図「おれ[を]（連れて行ってくれ）」（対格名詞が人名詞）の地図である。図1の赤い線で囲んだ部分は無助詞形の地域、図2では「ゴド」で標示する地域である。

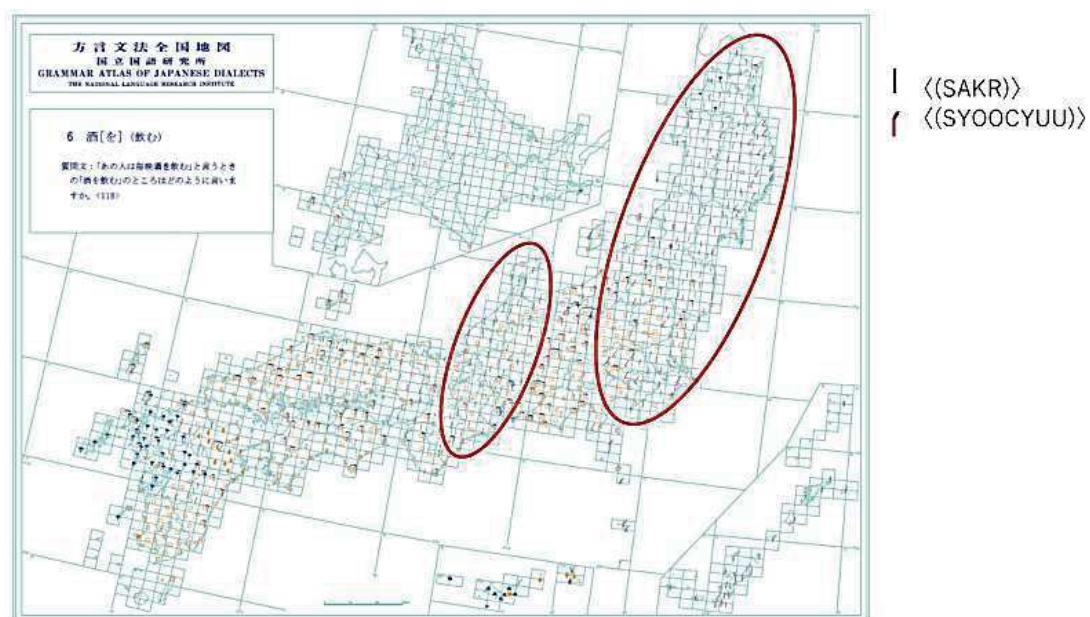


図1 『方言文法全国地図』第6図「酒[を]（飲む）」

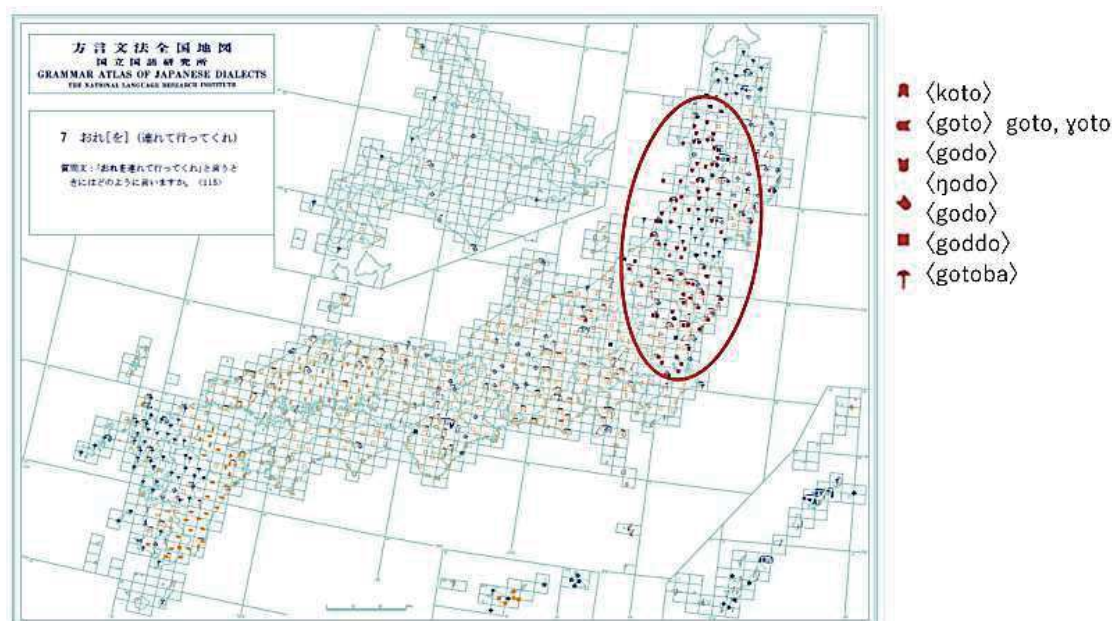


図2 『方言文法全国地図』第7図「おれ[を] (連れて行ってくれ)」

3. 『日本語諸方言コーパス』(COJADS) について

3.1 データについて

データとして使用する『日本語諸方言コーパス』(Corpus of Japanese Dialects; COJADS) について説明しておこう。COJADSとは各地方言の自然談話の音声データが検索ができるようにしたもので、音源は文化庁が1977～1985年に行なった「各地方言収集緊急調査」の方言談話の収録データである。全都道府県224地点、1地点につき30時間程度の談話録音テープがあり、データの一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(国書刊行会)として刊行されている(図3参照)。現在、モニター版として、この『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』所収の47地点、24時間分(各県1地点<沖縄のみ2地点>×約30分)の音声とその書き起こしデータを整備中で、平成31年3月に公開する予定である。



図3 『日本のふるさとことば集成』

COJADSの検索は、共通語訳から方言テキストを検索する方式をとっている。この方式の利点は、現代日本語の形態素辞書と検索ツールを利用することができる点、諸方言の横断検索ができる点である。将来的には、方言検索システムを整備する必要があると考えているが、そのためには各地点の方言形態素辞書を作らなければならない、かなりの時間を要する。そこで、とりあえず、共通語により検索する方法をとっている。図4は検索画面のイメージである。

前文脈	検索語	後文脈	地点	ID	話者
ウン ソエ カダナ うん それ [は] 刀	[を]	ノムス ホレ。 飲むし ほら。	弘前	053	B
シキー 「敷居	を	フンジャー イケナイヨ。 踏んでは いけないよ。」	東京	075	A
ネ オジジァ ソノ ワラ ね おじいさんは その 藁	オ を	ネーエ ね	羽咋	003	B
エー ベベ いい ベベ	[を]	キテンナー。 着ているなあ。	大阪	144	D
アノー ソノ カグラ あの その 神楽	[を]	マウネ。 舞うね。	広島	002	C
チュー コトバ という ことば	オ を	ツカイヨッタ。 使っていた。	北九州	027	B
ガッチュー ハナス よく 話	(オ) を	キケバ モー ナンダチャイガ 聞けば もう 涙だが	鹿児島	257	C

図4 COJADS 検索例 (助詞「を」)

3.2 使用上の注意点

COJADS は上記のようなデータを使用している。そのため、COJADS を使用する際には、次のような注意が必要である。

- ・ 話題、話者の数、話者同士の関係等がコントロールされていない。たとえば、各地点の話者数は、弘前市3人(男2, 女1)、東京2人(男1, 女1)、羽咋3人(男2, 女1)、大阪市6人(男4, 女2)、広島市3人(男1, 女2)、北九州市4人(男2, 女2)、鹿児島市3人(男2, 女1)とまちまちである。
- ・ 話者同士の関係が地点ごとに異なる。そのため、発話のスタイルも地点ごとにまちまちである。
- ・ 共通語で検索を行うため、方言と共通語訳との対応関係に注意が必要である。たとえば、方言と共通語との対応関係が難しい以下のようなケースが多々ある。

(2)弘前 79-002 B ハナペサ ソレ ゼンマイコダケンタノ マガサテ
鼻先に ほら ゼンマイみたいなのが 巻きついて

(3)羽咋 69-017 B アー タノシミナ テ ユーテ
ああ 気持ちがいい と 言って

(4)北九州 351-000 A ソレカラ モー セワイガルヨッタ。
それから もう 忙しがっていた。

4. COJADS による主格標示, 対格標示の地域差

4.1 検索結果

上の例に示したように, 対格標示形式は「を」で検索することができる。方言形が無助詞形の場合, 共通語テキストでは当該の助詞の訳が [] で囲まれて表示されるようになっているので, これで無助詞形も検索できるようになっている。以下に, 青森県弘前市, 東京都台東区, 石川県羽咋郡押水町, 大阪市, 広島市, 北九州市, 鹿児島県頰娃町の主格標示, 対格標示の検索結果を示す(北九州市については未公開データを含む)。

表1 主格助詞, 対格助詞の地域差 (出現回数(%))

地域	格	無助詞形	助詞あり	合計	備考
弘前	主格	98(84.5%)	ガ 18(15.5%)	116(100%)	
	対格	99(94.3%)	ゴト 6(5.7%)	105(100%)	
東京	主格	10(7.4%)	ガ 126(92.6%)	136(100%)	
	対格	35(43.2%)	オ 46(56.8%)	81(100%)	
羽咋	主格	6(14.6%)	カ ^o 15(36.6%) ア 20(48.8%)	41(100%)	
	対格	55(64.7%)	オ 30(35.3%)	85(100%)	
大阪	主格	25(22.5%)	ガ 86(77.5%)	111(100%)	
	対格	57(62.0%)	オ 35(38.0%)	92(100%)	
広島	主格	4(2.2%)	ガ 181(97.8%)	185(100%)	
	対格	14(8.2%)	オ 156(91.8%)	170(100%)	保留 7 ^{注1}
北九州	主格	22(6.6%)	ガ 309(93.4%)	331(100%)	
	対格	71(46.4%)	オ 82(53.6%)	153(100%)	
鹿児島	主格	2(1.6%)	ガ 126(98.4%)	128(100%)	
	対格	5(5.8%)	オ 77(89.5%) バ・オバ 4(4.7%)	86(100%)	

上の表から次のことが指摘できる。

- ・ 弘前では主格, 対格ともに無助詞形が基本である。
- ・ 広島, 鹿児島県頰娃では主格を「ガ」, 対格を「オ」で標示するのが基本である。
- ・ 東京都, 羽咋, 大阪, 北九州では主格を「が」で標示し, 対格をゼロまたは「オ」で標示する。
- ・ どの地域も主格より対格に無助詞形が多く現れる。

4.2 問題提起

これに対して, 次のようなことが問題となる。

- ・ 弘前では対格が助詞「ゴト」で示されることがある。それはどのようなときか。
- ・ 基本的に格助詞が標示される広島と鹿児島県頰娃では, どのようなときに無助詞形が現れるのか。
- ・ 東京, 羽咋, 大阪, 北九州で無助詞形が現れる条件は何か。

5. 弘前市方言の対格標示

弘前市方言の対格標示について、具体的に見ていくことにしよう。弘前市方言では、基本的に主格，対格が無助詞形で標示される。COJADS における無助詞形の割合は、主格が 84.5%，対格が 94.3%。語順は S-O-V が基本である。以下に無助詞形の例をあげる（用例の最初の数字は ID 番号，ABC…は話者記号である）。

- (5)045 B アノ ズサマ タエゴコ タダゲバ
あの おじいさん [が] 太鼓 [を] 叩くと
- (6)019 C ガムスダケンタモノ クスコサ トステサ
蛾虫のような もの [を] 串に 通してね
- (7)024 A ソステ テンビンサ マス エレデ カズイデ
そして 天秤に 鱒 [を] 入れて 担いで
- (8)039 A ハダハダテバ アノ ブリコ ガツツラガツツラガツツラテ
鱒という と あの ブリコ [を] がつつらがつつらがつつらと
カンダモンダデバナッ。
かんだものではないか。

しかし、助詞「ゴト」で標示される例が6例ある。以下がその例である。

- (9)067 A ソエゴト オラ n ド コステ ナメルンダー
それ(飴)を 私たち [は] こうして なめるんだ
(nは子音の前の鼻音を表す。)
- (10)001 B ソエゴト キレコデ コー クルンデー
それを 布切れで こう くるんで
- (11)019 C ソレゴト フセク° クスリダラスワ
それを 防ぐ 薬らしいですね
- (12)048 A アレー アノ キ キレゴト マナグサ サステ
あれは あの × 錐を 目に 刺して
- (13)019 C ジャンコ ノ フト ホレ X1セアゴト グルグルハット テ スタノー
田舎の 人 [が] ほら X1× を ぐるぐるハット と 言ったの
(X1は人名，×は意味不明な音声を表す)
- (14)102 C オエノ オヤ カチャタビゴト ハガヘダ
私の 親 [は] 裏返しの足袋を はかせた

では、どのようなときに「ゴト」が使われるのだろうか。先に見たとおり、先行研究では対格名詞の(a)有生性，(b)特定性，(c)代名詞，(d)動詞との隣接性 が対格標示形

式に関与的だという指摘がある。この4つの条件ごとに弘前市方言の対格標示形式の例を整理してみよう。

表2 条件ごとの対格標示形式の整理 (弘前) (出現回数)

	対格名詞	無助詞形	「ゴト」	合計
(a)有生性	人名詞	0	1	1
	動物名詞	8	0	8
	無生名詞	77	2	79
	形式名詞等	11	0	11
(b)特定性	固有名詞	1	2	3
(c)代名詞	ソレ・ソエ	0	3	3
	アレ	2	0	2
(d)隣接性	隣接	94	2	96
	非隣接	9	4	13

表2から、以下のようなことが分かる。

- (a)有生性について。対格名詞が人名詞の1例(13)は「ゴド」、動物名詞(魚, マス, ニシン, ブリコ), 無生名詞, 形式名詞等(コト, モノ, 準体助詞ノ)は無助詞でマークされている。このことから, 名詞句階層のうち人名詞は「ゴド」で標示され, それ以下の階層は無助詞形で標示されていることが分かる^{注2}。なお, 無生名詞が「ゴド」で標示される2例は, 名詞句と動詞が隣接していない例(12)、及び特定性の例(14)である。
- (b)特定性について。自然談話コーパスのCOJADSの場合, 文脈から特定性かどうかを判断することになるが, それは難しい。ここではとりあえず, 固有名詞(13)や特定の呼び名(14)には特定性があると考えた。これらは助詞「ゴド」で標示されている。固有名詞の無助詞形は次の例である。埋め込み文の例だが, それが理由かどうかはまだ分からない。

(15)020 A アノ マコ° タロムス ウリニ キタ ズサマ ダイブ
 あの 孫太郎虫 [を] 売りに 来た おじいさん [は] だいぶ
 ナカ° グ キタヨ
 長く 来たよ

- (c)指示代名詞について。指示詞「ソレ」の3例(9,10,11)は, すべて「ゴド」で標示され, 指示詞「アレ」の2例(16,17)はすべて無助詞形である。ただし, 「ソレ」の例のうち2例(9,10)は非隣接の例でもあるので, 指示詞と非隣接性のどちらにより「ゴド」が使われているのかは不明。「アレ」と「ソレ」との違いも今のところ不明である。

(16)019 C アレ ク n ダエデ ノマヘルンダビョン
 あれ [を] 砕いて 飲ませるんだろう

(17)068 A アレ カッテ ナー アレ アメウリセア
あれ [を] 買って なあ あれ [が] 飴売りよ

(d') 隣接性について。対格名詞句と動詞が隣接している例は、ほとんどが無助詞形、2例(11,14)が「ゴド」である。非隣接の例でも無助詞形の方が多いが、隣接している例にくらべて「ゴド」で標示される割合が高い(9,10,12,13)。このことから、非隣接性は「ゴド」の使用に参与している可能性がある。

6. 北九州市方言の対格標示

次に、北九州市方言の対格標示を見てみよう。北九州市方言では、主格は「が」で標示され、対格は無助詞形または助詞「オ」で標示される。COJADSにおける無助詞形の割合は、主格が6.6%、対格が46.4%である。北九州市方言の対格標示のポイントは、無助詞形と助詞「オ」がどのような条件により使い分けられているのかという点である。ここでも、対格名詞の(a)有生性、(b)特定性、(c)代名詞、(d)動詞との隣接性の4つの点から用例を整理してみよう。それを示したのが表3である。

表3 条件ごとの対格標示形式の整理 (北九州) (出現回数)

	対格名詞	無助詞形	「オ」	合計
(a)有生性	動物名詞	1	1	2
	無生物名詞	53	61	114
	形式名詞コト	4	4	8
(b)特定性	固有名詞	0	2	2
	疑問詞	5	1	6
(c)代名詞	コレ	1	0	1
	ソレ, ソコ	1	9	10
	アレ, アッチ	6	4	10
(d)隣接性	隣接	61	53	114
	非隣接	2	18	20

(a') 有生性について。有生名詞は動物の2例しかなく、無助詞形と「オ」が各1例、無生名詞や形式名詞でも、無助詞形と助詞「オ」の両方が使われている。人名詞の例がないので、これについては分からないが、用例の範囲では、有生性は格標示形式の選択に参与していない。

(b') 特定性について。弘前市方言と同じように、固有名詞には特定性が備わっていると考え、固有名詞をピックアップした(18,19)。これらは助詞「オ」で標示されている。また、疑問詞は不定を表す。この5例は無助詞形である(20,21)。このことから特定性は助詞「オ」の使用に関係していると考えられる。

(18)1-326 A カキノハズシチューチナー スシオ ニギッチ
柿の葉鮓というね 寿司鮓を 握って

(19)1-336 A モー カナラズ カキノハズシオ クレヨッタヨ

もう 必ず 柿の葉鮓を あげていたよ

(20)1-053 C アンタチャー モー ナン ハキヨッタカナ
あなたたちは もう なに [を] 履いていたかね

(21)1-240 A ナニ ウリー イキヨッタ
なに [を] 売りに 行っていた?

(c^o)代名詞について。代名詞はいずれも指示詞(コレ, ソレ, ソコ, アレ, アッチ)の例である。表3では、ソ系の指示詞はア系の指示詞に比べて助詞「オ」で標示される割合が高くなっている。ただし、ア系の指示詞には慣用句的な「アレ スル」が4例入っている(22,23,24,25)。これは動詞を代用するスル動詞的な用法で、「アレ」のあとに助詞「オ」を伴わない。したがって、指示詞の例から外す方がよいかもしれない。この4例を外すと、ア系の指示詞も「オ」で標示するものが増える(26)。なお、指示代名詞は、既出の名詞(句)、あるいは既知の名詞(句)を代用するものなので、特定性の特徴を持つと考えられる。(b)と合わせて、助詞「オ」の選択に特定性の要因が働いていることは間違いなさそうである。

(22)1-330 A アレ シヨッタラ タランモン。
あれ [を] していると 足りないもの。
(柿の葉寿司を重箱に入れて人にあげていたら重箱が足りないもの)

(23)1-349 A イネノ アレ スル トキジャケー
稲の あれ(刈り取り) [を] する 時だから

(24)5-050 B アレ ヤリヨッタ
あれ(石なごという遊び) [を] していた

(25)6-104 A アレ シー イキヤー カシテクレヨッタ
あれ(頼み) [を] しに 行けば 貸して呉れていた

デス ナー
です ねえ

(26)4-381 B ソレカラ アンタ アレオ ツクルチュータラ
それから あんた あれ(苗)を 作ると思ったら

(d^o)隣接性について。対格名詞句と動詞が隣接しているときには、無助詞形と助詞「オ」の両方が現れているが、非隣接の場合は20例中8例が助詞「オ」でマークされている。非隣接の場合には助詞「オ」が選択されていることが分かる。

(e)情報構造について。以上の4つの要因の他、情報構造が関係していると思われる例がある。たとえば、(27)では直前のAの発言にBが同意して、Bの発言を繰り返す例、(28)は「何を履いて学校へ行っていたか」という話題において、Dの「麻履き」「下駄」という発言に対してCが「草履」「きれいな草履」と答え

る例で、いずれも対格名詞句が焦点化されている。情報構造については、ひとつひとつの用例を前後の文脈の関係で整理しなければならないので、数量的な考察には向かないが、無助詞形か助詞「オ」かの考察には不可欠である。

(27)026 A ハヨ モドランカー チューゲナ コトワ イーヨッタヤロ
「急いで 戻らないか」 というような ことは 言っていたらろう

027 B ウン。ハヨ モドランカ チュー コトバオ ツカイヨッタ
うん。「急いで 戻らないか」 という ことばを 使っていた

(28)053 C アンタチャー モー ナン ハキヨッタカナ
あなたたちは もう なに [を] 履いていたかね

054 D アタシタチャー アノー アレ アノー アサバキ
私たちは あのー あれ あのー 麻履き [というのが]

アリヨッタロー
あったらろう

057 D アレヤラ ソレカラ ゲタヤラ
あれやら それから 下駄やら

058 C アノー X6 チャント フタリデ ゾーリオ ハイテ X7ノ アノ
あの X6 ちゃんと 二人で 草履を 履いて X7の あの

ババサンガ キレイナ ゾーリオ ツクリヨッタヨネ
おばあさんが きれいな 草履を 作っていたよね

7. 鹿児島県頰娃町方言の対格標示

鹿児島県頰娃町方言は、主格が「が」で、対格が「オ」「バ・オバ」で標示される。無助詞形の割合は、主格が1.6%、対格が5.8%である。「オ」は名詞末母音と融合することが多い（無助詞形なら(29)はバケツ, (30)はハナス, (31)はバクダン, (32)はミッである）が、融合しない形も出てきている(33)。

(29)475 A クワジガ アレバ バケツ モッ
火事が あれば バケツを 持って

(30)257 C ガッチュー ハナス キケバ モー ナンダチャイガ
よく 話を 聞けば もう 涙だが

(31)231 A アオテ イダッ バクダンノ ナケ° ッ
青戸に 行って 爆弾を 投下し

(32)388 B ミヅユ ノン トッ イダヂョランヂャッタ ト ユーチェ
水を 飲む 時に 行っていなかった と 言って

(33)191 C バケツノ アイヂェ ミズオ ズット トイチンデ
バケツの あれで 水を ずっと とりついで

この他、「バ」「オバ」で標示される例が4例ある。このうち「バ」については、普通、鹿児島方言で単独の「バ」が使われることがないこと、(34)(35)がいずれも「アイ(あれ)」に続いた例であることを考えると、これは「オバ」の例と見る方がよさそうである(ai+oba > ajuba > aiba)。「オバ」は「オ」に比べてフォーマルなスタイルで使われるが、情報構造上の違いについては未詳である。

(34)405 C マーン カワン ウエニ アイバ ハッテナ ハラ
まあ 川の 上に あれを 張ってね ほら

(35)479 A アイバ モッ ハシツイムンヂャッタッチャニー
あれを 持って 走っていくものだったのだね

(36)308 C アダイケ° ン オトサンカ° トオバ ヤッテ
私の家の おとうさんの ものを くれて

(37)493 A エー ウッカシ チュトオバ モツタイハラ
ええ ウッカシ というのを 持ったりね

無助詞形が5例見られる。(38)(39)(40)は名詞が「アイ」「オイ」の例だが、(34)(35)を「オバ」の例と考えたのと同じ理由で、これらは助詞「オ」の融合形と見ることができる(ai+o > aju > ai, oi+o > oju > oi)。そうすると、無助詞形の確例は(41)(42)の2例だけとなる。これも「X16サンヌ」(X16san+o > X16sannu)、「ミセー」(mise+o > misee > mise)の可能性もある。

(38)138 C マン ナッダゲ チュッサー アイ セダバツ
まあ なるだけ と言って あれ [を] したけど

(39)157 B X24 ダ ワガエデー アイ ショッタバツ
X24 たちは 自宅で あれ [を] していたが

(40)442 B X47 カ° オイ チカマユンナ チュバツ チカマエツソラ
X47 が 私 [を] 捕まえるな と言うけれど 捕まえてね

(41)191 C ガッチュイ X16サン ミーコ° ギャイカ チュ ユダチュ
まるで X16 さん [を] 見るようだ と 言ったそうだ

(42)191 C X38 サンチュワ イマ ミセ ヤッドカ° ナー
X38 さんという人は 今 店 [を] やっているかね

8. まとめ

弘前市方言では、

- ・ 対格は無助詞で標示されるのが基本である。
- ・ 助詞「ゴド」は、対格名詞句が人名詞の場合、特定性を持つ場合、動詞に隣接しない場合に使用される。

北九州市方言では、

- ・ 対格は無助詞形または助詞「オ」で標示される。
- ・ 助詞「オ」は、対格名詞句が特定性を持つ場合、動詞に隣接しない場合、焦点化されている場合に使用される。

鹿児島県頴娃町方言では、

- ・ 対格は助詞「オ」「オバ」で標示される。
- ・ 無助詞形は極めてまれで、無助詞形のように見えるものも、助詞「オ」の融合形である可能性が高い。

注

1. 「保留」は、名詞語末母音が **o** の長母音の場合である。

047 コドモニ イシヨー ツケルノニ
子供に 衣装 [を] つけるのに

099 アノー エンシヨー メグンデス。
あの 煙硝 [を] 砕くのです。

COJADS では上のような例を [を] で示しているが、助詞「オ」が接続した可能性もある。そのため、表1では「保留」にしている。なお、名詞語末母音が **o** の短母音の場合は、長音化しているか、否かで判断した。

184 フロシキー ツツンデ ユーヨーナ コト ショッテデシタ。
風呂敷へ 包んで [と] いうような ことを しておられました。

203 ミノ コシラエヨラレタガ。
蓑 [を] 作っておられたが。

広島方言の対格標示形式については、小西(2015)に詳しい。

2. 茨城県水海道方言の「ゴド」は有生対格マーカー(佐々木 1998)、秋田方言の「ドゴ」は有生の対象物の取り立て(日高 2000)、仙台市方言の「ドゴ」は有生かつ特定の目的語に対して用いられる(玉懸 2002)という。これに対し、弘前市方言の「ゴド」は、有生名詞のうち人名詞に限られる。

引用文献

- 阿部貴人(2009)「対話における無助詞化の地域差—東京・大阪・津軽方言の対照から」『月刊言語』38-4, pp.40-46.
- 小西いずみ(2015)「広島方言の対格表示—談話資料による軽量的把握—」『国語教育研究』56, pp.13-24.
- 佐々木冠(1998)「水海道方言の対格—有生対格と無生対格の統語論—」『日本語科学』4, pp.99-120.
- 竹内史郎・松丸真大(2015)「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー」国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会「日本語のアスペク

ト・ヴォイス・格」(2015年8月21-23日)発表資料.

玉懸元(2002)「仙台市方言における格助詞相当『ドゴ』の用法」『国語学会2002年度秋季大会予稿集』pp.127-132.

日高水穂(2000)「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』無明舎出版.

松田謙次郎(2000)「東京方言格助詞『を』の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』51-1, pp.61-76.

皆島博(1993)「日本語の格助詞「を」の省略について－有生性と定性の関与の可能性」『言語学論叢 松本克己克己教授退官記念論文集』, pp.58-70.

付記

本稿は、2016年7月6日に開催された東京外国語大学語学研究所定例研究会における発表をもとに、一部修正を加えて作成したものである。席上、多くの先生から貴重なご意見をいただいた。この場を借りて御礼申し上げる。なお、この研究は、平成25～27年度科研費基盤(B)一般25284087、平成28～32年度科研費基盤研究(A)一般16H01933、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の掃滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。

奄美・沖縄の言語研究から

ー奄美方言のエビデンシャルティー

木部 暢子 (国立国語研究所)

概要

与論方言では、話し手が直接見たり聞いたり感じたりしたことを報告するとき、そうでないことを報告するときとで異なる形式を使う。この2種類の形式は、情報のソースを表す *direct evidence* と *indirect evidence* の違いに当たると考えてよい。2種類の形式は、主語の人称にも対応しており、主語が一人称の場合、話し手が直接見たり聞いたりしたことを表す形式が使えない。形容詞述語の場合、2つの形式は *direct evidence* と *indirect evidence* を表すと同時に、一時的な状態と恒常的な状態といったリアリティの表現を表す。

奄美大島龍郷町瀬留方言でも動詞の非過去形に2種類の形式が使われる。これらはメノマエ性 (松本 1996) と名付けられているように、話し手が目撃しているデキゴトとそうでないデキゴトを表している。奄美大島名瀬方言にも2種類の終止形があるが、*-m* 形は客観的根拠のある事態に対する断定を、*-ŋ* 形は *mirativity* を表している。

アスペクト表現において～ヨル、～トルの対立をもつ北九州市方言では、～ヨル、～トルのアスペクトの対立がなくなった場合に～ヨルが *direct evidence* 的な意味を担うことがある。

古典語にも *direct evidence* 的な表現がある。推量の助動詞「なり」は実際何かの音が聞こえている表現、「めり」「らし」は視覚的、聴覚的な直接証拠に基づく推量の表現である。

キーワード

与論方言, 奄美方言, 九州方言, *direct evidence*, *indirect evidence*

1. はじめに

鹿児島県与論方言では、動詞・形容詞の終止形に2種類の形がある。『太郎は海へ行った』を与論方言で何と言いますかと質問すると、『行った』にはイキュータン (*ikjuutan*) とイジャン (*izan*) の2つがある。どんな場面ですか」という答えが返ってくる。「どう違うのですか」と質問すると、次のような違いがあると話者は説明してくれた。

- (1) タローヤ ウンカティ イキュータン。・・・話者が目撃したことを言う。
太郎 は 海 へ 行った (行きおった)。
- (2) タローヤ ウンカティ イジャン。・・・単に過去の事実を言う。
太郎 は 海 へ 行った。
- (3) ワナー ウンカティ イジャン。・・・話者の過去の体験の事実を言う。
私 は 海 へ 行った。
(菊秀史『与論の言葉で話そう2 動詞を覚えよう』:5)

話者が目撃したこととそうでないことの違いだとすると、イキュータンとイジャンの違いは、エビデンシャリティ（証拠性、証拠様態などと訳される）と呼ばれている現象にあたるのではないか。これが本稿の出発点である。（与論島の位置については、末尾の付録図を参照のこと）。

2. エビデンシャリティとは

エビデンシャリティとは何か。Alexandra Y. Aikhenvald (2003) は次のように述べている。

- (4) In a number of languages, the nature of the evidence on which a statement is based must be specified for every statement—whether the speaker saw it, or heard it, or inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else. This grammatical category, referring to an information source, is called ‘evidentiality’. (Aikhenvald 2003: 1)

また、工藤 (2004) には、次のように書かれている。

- (5) <証拠性(evidentiality)> : 話し手が伝える情報のソースを明示する文法的カテゴリー。direct evidence と indirect evidence がある。様々な言語で、<人称>と関連することや、パーフェクトからも発展することが指摘されている。(工藤 2004: 33)

与論方言のイキュータンとイジャンをこれに対応させてみると、イキュータン（話者が目撃したこと）は “the speaker saw it”, “direct evidence” に当たり、イジャン（単なる過去の事実）は “the speaker inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else”, “indirect evidence” に当たるように思われる。主語（動作主）が第一人称の場合にイジャン（単なる過去の事実）が使われるのは、話者は自分の動作を直接見ることができないので、「非目撃」 “indirect evidence” のカテゴリーに入るためである。

与論方言では、過去形だけでなく非過去形にも2種類の形がある。(6) は直接、太郎を見て発話している場合、(7) は過去の事実を述べる場合である。

- (6) 前方から太郎が歩いてくるのを見て
アッ アマカラ タローガ {キュイ/*キュン}。(*は非文を表す)
あっ 向こうから 太郎が 来る。(菊 2007: 4)
- (7) 五時に来ると行っていた太郎が七時にしか来なかったことを聞き手に話す場合
タローヤダー ゴジンヤ キュンチュタルムヌ シチジナティ キュン。
太郎は さあ 五時には 来ると言ったのに 七時になって 来おる。
(同: 152)

与論方言のエビデンシャリティと思えるような現象について、以下の節でもう少し詳しく見ていこう。

3. 与論方言のエビデンシャルティ

与論方言のエビデンシャルティについては、工藤(2014)に分析があるが、ここでは菊秀史氏の『与論の言葉(ユンヌフトゥバ)で話そう』の第2巻、第4巻を資料として、その特徴を考察する。『与論の言葉で話そう』は、文脈付きの用例が豊富に掲載されていて、与論方言を勉強するのに大変よいテキストである。第2巻が「動詞を覚えよう」(2007)、第4巻が「形容詞 助詞 表現意図」で、ここに動詞・形容詞の文例が数多く掲載されている。

3.1 過去表現に現れる2種類の形

与論方言では、過去表現に2種類の形が使われる。たとえば、「掃く」「買う」「間に合う」には(8)ポーキュータン/ポーチャン(掃いた)、(9)ヘータン/ホータン(買った)、(10)マニエータン/マニオータン(間に合った)の2つの形がある。前者は<話者が直接見たり聞いたり経験したりしたことの報告>(8a, 9a, 10a, 10d)、後者は<過去の客観的事実の報告>(8b, 9b, 10b)や<一人称主語の文>(8c, 9c, 10c)である。

- (8)a. ヤコー シカマ ヤンメー ポーキュータン。(話者が見たこと)
兄は 朝 庭(を) 掃いた(掃きおった)。(菊 2007: 68)
- b. タローヤ シカマ ヤンメー ポーチャン。(過去の客観的事実)
太郎は 朝 庭(を) 掃いた。(同: 67)
- c. ワナー シカマ ヤンメー ポーチャン。(一人称主語)
私は 朝 庭(を) 掃いた。(同: 65)
- (9) a. タローヤ デパートノンティ スーツ ヘータン。(話者が見たこと)
太郎は デパートで スーツ(を) 買った(買いおった)。(同: 68)
- b. タローヤ フドゥ ミークン クルマ ホータン。(過去の客観的事実)
太郎は 去年 新しい 車(を) 買った。(同: 67)
- c. 制服は ホータミー > ホータン。(一人称主語)
制服は 買ったか? > 買った。(同: 65)
- (10) a. 太郎ヤ 授業カチャー マニエータン。(話者が見たこと)
太郎は 授業までには 間に合った。(同: 69)
- b. (出発時刻ぎりぎりに間に合っ)ユカテー マニオータン。(客観的事実)
よかった 間に合った。(同:139)
- c. ウロー 遅刻シランタミー。>授業カチャー マニオータン。(一人称主語)
君は 遅刻しなかったか。 授業までには 間に合った。(同: 66)
- d. ウロー 遅刻シランタミー。>授業ナンヤ マニエータン。(経験して分かった事実, 感覚)
君は 遅刻しなかったか。 授業には 間に合った。(同:138)

歴史的事実を報告するときには、直接見たり聞いたりしたことを報告する形が使えない。たとえば、聖徳太子が主語の(11)ではタテュータン(建てた)ではなくタティタンと言わなければならない。もし、タテュータンを使うと、建立されるのを見ていたことになる

という(菊 2007:69)。(12a)も聖徳太子が主語なのでイエータン(おっしやった)ではなくウワーチャンと言わなければならない。主語がフジョー(叔父)の場合、直接見たり聞いたりしたのであればイエータンが使える(12b)。

- (11) 法隆寺ヤ 聖徳太子ガ {*タテュータン/タティタン}。
法隆寺は 聖徳太子が 建てた。(菊 2007: 67-69)
- (12) a. 聖徳太子ヤ 「和を以って尊しと為す」チチ {*イエータン/ウワーチャン}。
聖徳太子は 「和を以って尊しと為す」と おっしやった。(同: 67, 69)
- b. フジョー アッチャー ワンヌ ウンカティ ソーユンチ イエータン。
叔父は 明日 私を 海に 連れると おっしやった。
(話者が直接聞いたこと)(同: 69)

以上のように、与論方言の2種類の過去表現は、どちらか一方を選ぶ二者択一の関係にあり、一方が **direct evidence** による情報(話し手が直接見たり聞いたりした情報)、もう一方が **indirect evidence** による情報(それ以外の情報)を表すと考えられる。

ところで、直接見たり聞いたりした情報か、それ以外の情報かという点、「そうだ」「だろう」「ようだ」「らしい」等の認識のモダリティが思い出される。仁田他編(2014:631)によると、標準語の「そうだ」は「第三者から得た情報であるという情報の仕入れ方」を、「だろう」は「事態成立を不確かさを有するものとして、話し手の想像・思考の中で捉えたこと」を、「ようだ」「らしい」は「事態が周りに存在している兆候・証左から引き出されたものであること」を表すという。「そうだ」は「第三者から得た情報」を表す点で **indirect evidence** 的な色彩を帯びているが、「だろう」は **evidence** を問題としていない。また、「ようだ」「らしい」は **direct evidence** 的である。このように、標準語ではエビデンシャルティが推量表現とさまざまな強さでオーバーラップしている。

では、与論方言のエビデンシャルティは、認識的モダリティとどのような関係にあるのだろうか。まず、与論方言には上記の2種類の終止形の他に認識的モダリティを表すテュン(伝聞)、ラ、ゲーラ(推量)、シャミ、ラシャミ(予想)、ギサイ(様態)等の形式が存在する。たとえば、(13)のシチャンテュンはシチャン(「した」の **indirect evidence** 形式)にテュンが付いたもの(cf.「した」の **direct evidence** 形式はシュータン)、(14)のキュッシャミ、(15)のキュンゲーラは「来る」の **indirect evidence** 形式にシャミ、ゲーラが付いたもの(cf.「来る」の **direct evidence** 形式はキューイ。非過去形のエビデンシャルティについては、次節で述べる)、(16)のイキューラは「行く」の連用形イキにフラ(居ら)が付いたもの、(17)のキーギサイは「来る」の連用形にギサイが付いたものである。

- (13) 太郎ヤ サッカー大会ノンティ 優勝シチャンテュン。(伝聞)
太郎は サッカー大会に 優勝したそうだ。(菊 2007: 84)
- (14) アッチャーヤ 太郎ガ アシビンヤ キュッシャミ。(自分の予想)
あしたは 太郎が 遊びに 来るだろう。(同: 156)
- (15) アッチャー 太郎ターガ アシビンヤ キュンゲーラ。(推量)
あした 太郎たちが 遊びに 来るかな。(同: 157)

(16) 東京カチャー ウラン マージ イキュー^ラヤー。(推量)

東京には 君も 一緒に 行くだろう?(同: 133)

(17) 来週ヤ 東京カラ 太郎ガ キーギサイ。(様態)

来週は 東京から 太郎が 来るらしい。(同: 26)

このように、与論方言ではエビデンシャリティと推量表現が形態として独立しており、一文中に両者が共起することがある。それに対して、標準語ではエビデンシャリティ専用の形式がない。そのため、与論方言を標準語に訳す場合、(8a), (9a) では「掃きおった／掃いた」「買いおった／買った」のように、direct evidence (過去) を「おった」で、indirect evidence (過去) を「た」で訳している。ただし、(10) では a から d まですべて「間に合った」としか訳すことができず、direct evidence と indirect evidence を訳し分けることができない。

与論方言の direct evidence を「おった」で代用させることが可能だとすると、与論方言においてエビデンシャリティとアスペクトがどのような関係になっているのかが気になる。与論方言の direct evidence の形は、実際、「し+をる」に由来している。「し+をる(ヨル)」は、西日本方言ではアスペクト(進行相)を表す。与論方言の「し+をる」が direct evidence を表すとすると、与論方言ではアスペクト(進行相)はどのような形で表されるのだろうか。それは「して+をる」である。与論方言のエビデンシャリティとアスペクト・テンスの関係を詳しく論じた工藤他(2007)、工藤(2014)によると、進行相にも direct evidence と indirect evidence の両方があるという。つまり、エビデンシャリティはアスペクトとも異なる形態で示される。これらを整理すると、次の表のようになる。

表1 与論方言の direct evidence, indirect evidence, アスペクト形式

テンス	相	evidentiality	「掃く」	「飲む」	「する」
非過去	完成相	direct evidence	ポーキューイ	ヌミュイ	シュイ
		indirect evidence	ポーキュン	ヌミュン	シュン
	進行相	direct evidence	ポーチュイ	ヌドゥイ	シチュイ
		indirect evidence	ポーチュン	ヌドゥン	シチュン
過去	完成相	direct evidence	ポーキュータン*	ヌミュータン*	シュータン*
		indirect evidence	ポーチャン	ヌダン	シチャン
	進行相	direct evidence	ポーキュータン*	ヌミュータン*	シュータン*
		indirect evidence	ポーチュタン	ヌドゥタン	シチュタン

* 完成相過去の direct evidence と進行相過去の direct evidence は同じ形になる。工藤他(2007)には「numju:tan は・・・動作の進行を目撃した場合でも、動作全体を目撃した場合でもよい」とある。

以上のように、与論方言の2種類の過去形式は、認識的モダリティともアスペクトとも異なるカテゴリー、すなわちエビデンシャルティを表していると言うことができる¹⁾。

3.2 非過去表現に現れる2種類の形

与論方言では、非過去形にも *-i* 形と *-N* 形の2種類の形式がある。『与論の言葉 (ユンヌフトゥバ) で話そう (2)』によると、この2つは同じ文脈で使うことができ *-i* 形が客観的・説明的な表現、*-N* 形が主観的な表現だという。

(18) タローヤ イダガ。

太郎 は どこ？

アリヤー ヘヤノンティ シュクダイ {シュイ/シュン}。

彼は 部屋で 宿題(を) しおる。(菊 2007: 2)

(19) 優勝候補の A チームと万年最下位の B チームが対戦するのを聞いて

A チームヌ ハタナージ {ハチュイ/ハチュン}。

A チームが 必ず 勝つ (同: 3)

しかし、先に引用した (6) や次の (20) では、*-N* 形を使うことができない。また、話し手に起きている身体感覚の説明には *-i* 形が使われる (21)。これらは発話時において話し手がその動作を直接見たり聞いたり感じたりした事態を表す。このような文脈では *-i* 形しか使えない。

(6) (再掲) 前方から太郎が歩いてくるのを見て

アッ アマカラ タローガ {キュイ/*キユン}。

あっ 向こうから 太郎が 来る。(菊 2007: 4)

(20) 木陰で休んでいるとき、蟬の声に気付いて

アッ アシャシャヌ {ナキュイ/*ナキユン}。

あっ 蟬が 鳴く (鳴きおる)。 (同: 4)

(21) ワタヌ {ヤミュイ/*ヤミュン}。(話し手の身に起きている感覚の説明)

腹が 痛む。(同: 3)

先の (18), (19) で2つの語形が使えるのは、(18) では「太郎が部屋で勉強している」姿を直接見て回答する場合 (シュイ) と、直接は見ずに知識により回答する場合 (シュン) の2とおりの回答があり得るためだと思われる。また、(19) の「勝つ」は未来に発生する事態であって、発話時点では直接見ることができない。そのような場合には、*-i* 形と *-N* 形の *evidential* な対立が中和するのだと考えられる。

以上から、与論方言では非過去表現でも *direct evidence* と *indirect evidence* の違いが *-i* 形と *-N* 形によって区別されていると言うことができる。

3.3 質問文に現れる2種類の形

過去表現, 非過去表現に表れる2種類の形式は, *direct evidence* と *indirect evidence* に当たると考えてよさそうである。ここでは, それを補強する資料として, 2種類の形式が質問文に使われた場合を見てみよう。

- (22) タローヤ ヌー シュイガ。 > ヘヤノンティ ベンキョーシュイ。
太郎 何(を)しているか。部屋で 勉強している。(菊 2007: 155)
- (23) タローヤ 日曜日ンヤ ヤーヌタシキナガ シュイイー。 > シュイダー。
太郎は 日曜日には 家事手伝いなど しおるか。 しおる (同: 155)
- (24) タローヤ イチ キュンガ。 > アッチャー キュン。
太郎は いつ 来るの。 明日 来る。 (同: 155)
- (25) ユフイヤ ヌー コレンガ。
夕食は 何 食べる? (同: 155)
- (26) タロー ウロー アッチャー トショカンカティ イキュンミー。
太郎 君は 明日 図書館に 行く? (同: 154)

(22), (23) は発話時における太郎の動作に関する質問, (24) は不定時, (25), (26) は未来における聞き手や太郎の動作に関する質問で, (22), (23) では *-i* 形 (*direct evidence*) が, (24), (25), (26) では *-N* 形 (*indirect evidence*) が使われている。(22), (23) では, 聞き手が太郎の事態について *direct evidence* を持っているという前提で質問しているので, *-i* 形 (*direct evidence*) が使われている。一方, 未来に生じる事態については, 話し手も聞き手も *direct evidence* を持っていないため, (24), (25), (26) では *-N* 形 (*indirect evidence*) が使われる。

3.4 主語が一人称の場合

主語が一人称の場合, *-N* 形 (*indirect evidence*) による情報を表す形式が使われることは, 先に述べたとおりである。次の例でも *-i* 形ではなく, *-N* 形が使われる。

- (27) a. ウロー シュクダイヤ ナラチャミー。
君は 宿題 は 済んだのか。
b. (私は) ナマカラ {*シュイ。 / シュン。}
これから する。(菊 2007: 2)

ただし, 未来に生じる事態に対しては *-i* 形 (*direct evidence*) が使われることがある (28)。前節の (18), (24), (25), (26) と同じように, 未来の事態に関しては, *evidential* な対立が中和するためだと考えられる。

- (28) a. ウロー シュクダイヤ シランヌイ。
君は 宿題 は しないのか。

- b. (私は) ナマカラ シュイヨー。
これから する よ。(同: 2)

3.5 形容詞に現れる2種類の形

形容詞の言い切り形にも *-i* 形と *-N* 形の2種類がある。『与論の言葉で話そう (4) 形容詞 助詞 表現意図』(2014) から *-i* 形と *-N* 形の例を引用する。

- (29) a. 会社に遅れそうになったので朝食を取らずに出勤し、勤務中、ひもじい思いをした。翌日、同僚に「やっぱり朝食を食べないとお腹がすく」と言う → ヨーシャイ
b. 朝食を食べずに登校しようとする子どもに親が「食べないとお腹がすく」と言う → ヨーシャン (菊 2014: 42)
- (30) a. 与論生まれの太郎が南太平洋の島へバカンスに行きました。その海はとてもきれいでした。滞在中に与論の家族から電話があり「その海はどう?」と聞かれたので、「とてもきれいだ」と答える → チュラサイ
b. 与論生まれの太郎が南太平洋の島へバカンスに行きました。現地の人から「与論の海はきれいか」と聞かれて「とてもきれいだ」と答える → チュラサン (同: 42-43)
- (31) a. 友人が「友子が作ったパイナップル漬けを買って食べたが美味しかった」と言ったのを受けて「ほんとだね。私もよく買って食べている。彼女のパイナップル漬けは美味しい」と同調する → マサイ
b. 友子はパイナップルの漬け物を製造・販売しています。お客さんに「私の作ったパイナップル漬けは美味しい。買って下さい」と言う → マサン

(29a) は話し手が発話時に感じている自身の状態, (30a) は話し手がそのときに見て感じた海の状態, (31a) は以前に話し手が感じたことをそのまま伝える表現である。それに対し (29b) は未来に起きるであろう状態, あるいは一般的に起きる状態, (30b) は発話時には見ていないが, 過去の認識に基づく恒常的な海の状態, (31b) は友子が作るパイナップル漬けの恒常的な性質を伝える表現である。菊 (2014) によると *-i* 形は「言った言葉に責任を負わない感じがある」, *-N* 形は「言った言葉に責任を置く感じがある」という。このような感じは, *-i* 形が一時的な状態を表現するのに対し, *-N* 形が恒常的な状態を表現するところから生じるのであろう。形容詞ではエビデンシャリティ形式が一時的な状態と恒常的な状態 (レアリティ) を表している²⁾。

4. 奄美大島龍郷町方言のメノマエ性

奄美大島の方言のエビデンシャリティについては, 松本 (1996) に奄美大島龍郷町瀬留方言を資料とした詳細な分析がある。松本 (1996) ではエビデンシャリティではなく, メノマエ性という語が使われている。メノマエ性は次のように定義される。

さまざまなすがたで, ココに, イマ, アクチュアルにあらわれているデキゴトと, そ

れをハナシテが目撃していることを、ある文法的なかたちに表現してつたえているとき、そこにいいあらわされている意味的な内容をメノマエ性といっておく。(松本 1996:77)

具体的な内容は、次のとおりである。瀬留方言の非過去形には、「飲む」を例にとると m 語尾由来形の numjuN とヲリ形 numjuri の 2 つがあり、ヲリ形 numjuri は、ハナシテがいまメノマエにしている一回かぎりの個別的なデキゴトをになう (p.78)。デキゴトを表す自動詞文においてヲリ形非過去形がメノマエ性をにないやすい (32, 33) が、他動詞文でも第三者のうごきをさしだすときにはヲリ形非過去形が使われることがある (34) (p.81)。

(32) tiNbikjarinu hi?karjuri. いなびかりがひかっている。

(33) basinu kju:ri. バスがくる。

(34) usinu mizi numjurija:. うしがみずをのんでいるねえ。

生理現象については、ハナシテ自身のこともいえるが、そのばあいでも、感覚点などをメノマエにしている (p.80)。

(35) aita, jamjuri. — da:nu jamjuri. — haguinu jamjuri.

あいた、いたい。—どこがいたいの。 — あしがいたい。

上の例を見ると、瀬留方言のヲリ形は与論方言の *direct evidence* の形 (-i 形) とほとんど同じ使われ方をしている。生理現象のときに話し手自身のことをメノマエ性で表現するのも、与論方言の (21) ワタヌ ヤミュイ (腹が痛む) が *direct evidence* の形 (-i 形) であるのと同じである。

過去形については、松本 (1996) ではもっぱらシタ過去のシタリ形 nudari が取り上げられていて、シヨッタ過去の numjutaN が取り上げられていないので与論方言との比較ができないが、シタリ過去形を述語とする文は、過去におこったデキゴトがそのまま、あるいはそれにもとづく形跡、痕跡が現在もメノマエにあらわれていること (p.82)、シテの動作の結果がはなしてのメノマエにあること (p.89) を表すという。

5. 奄美大島名瀬方言のエビデンシャリティ

奄美市名瀬方言にも 2 種類の終止形がある。三石 (1993) によると、名瀬方言の言い切り形には「活用語尾が ~ri のものと ~ŋ のものとの二形があり」、「~ri は客観的に根拠のある事態に対する断定を表現するのに対して、~ŋ は話し手の感動を表現する」(p.35) という。(36a), (37a), (38a) が ~ri 形, (36b), (37b), (38b) が ~ŋ 形の例である。

(36) a. kju:ja ?aminu φururi (今日は雨が降る)

b. kafigari ?aminu φuruŋ (こんなにまで雨が降るねえ)

- (37) a. kazenu ɸuttʃuri (風が吹く)
 b. kaʃigari kadzenu ɸuttʃun (こんなにまで風が吹いてるねえ)
- (38) a. ʔaŋ tsuja ɕigaɕiŋ noro ʔuruuri (あの人は毎日布を織る)
 b. ʔaŋ tsuja korasa noro ʔuruun (あの人はきれいに布を織るねえ)

三石 (1992) のいう客観的な根拠とは、話し手が直接見たり聞いたりしたことに限らない。名瀬方言の～ri 形は、与論方言の -i 形や龍郷町瀬留方言のヲリ形とは同じではないようである。また、～ŋ 形が「話し手の感動を表現する」とすると、名瀬方言の～ŋ 形は、エビデンシャルティというよりも mirativity (the marking of unexpected information, Scott 1997) と考える方がよいかもかもしれない。

6. 九州方言のアスペクトとエビデンシャルティ

ここまで、与論方言では direct evidence と indirect evidence を表す2つの形式が対立していることを見てきた。先に述べたように、標準語にはエビデンシャルティを表す形式が存在せず、本土方言の多くもエビデンシャルティを表す形式を持っていないが、与論方言の direct evidence が「し+をる」に由来するとすると、あるいは、西日本方言の進行相のヨル（「し+をる」に由来）にもエビデンシャルティの要素があるかもしれない、という疑問が湧いてくる。エビデンシャルティとアスペクト・テンスはオーバーラップすることが指摘されている (*The Oxford Handbook of Tense and Aspect*)。

周知のように、西日本方言ではアスペクトが「～ル/～ヨル/～トル」の3項対立を示す(表2)。このような方言では、動詞の種類(動作か変化か)に限らず、ほとんどの動詞で進行相と結果相の表現を作ることができる(表3)。

表2 本土方言のアスペクト表現の地域差

	完成相	進行相	結果相
東日本方言	読ム	読ンデイル	
西日本方言	読ム	読ミヨル	読ンドル

表3 西日本方言のアスペクト表現

	完成相 ～ル	進行相 ～ヨル	結果相 ～トル
動作動詞	読ム	読ミヨル	読ンドル
変化動詞	死ヌ	死ニヨル	死ンドル

ただし、動詞によっては、結果相の～トルが進行相の～ヨルの領域へ意味を拡大する場合がある。福岡県北九州市方言(筆者(1955年生)の内省)では、「泣く、鳴る、降る」等の動作を表す自動詞に～トルの意味拡大が見られる(表4)。

表4 福岡県北九州市方言のアスペクト表現

動詞の種類	自他	完成相	進行相	結果相
動作動詞	自動詞	泣ク	泣キヨル	泣イトル
	他動詞	読ム	読ミヨル	読ンドル
変化動詞	自動詞	死ヌ	死ニヨル	死ンドル
	他動詞	開ケル	開ケヨル	開ケトル

～トルの意味が拡大すると、「泣く、鳴る、降る」等では～ヨル・～トルの両方が進行相を表すようになる。ただし、意味がまったく同じというわけではない。あくまで比較の問題ではあるが、～トルに比べて～ヨルの方に *direct evidence* 的な性質が強く現れる場合がある。たとえば、(39a), (40a) では～トルよりも～ヨルの方が自然である。ただし、～トルが使えないというわけではない。それに対して、(39b), (40b) では～ヨル、～トルが同くらい自然である。

- (39) a. 目の前で太郎（あかちゃん）が泣いているのを見て報告するとき
タローチャンガ {ナキヨルヨ/? ナイトルヨ}。
太郎ちゃんが 泣いているよ。
- b. 鳥の声がどこからか聞こえる
ドッカデ トリガ {ナキヨルヨ/ナイトルヨ}。
どこかで 鳥が 鳴いているよ。
- (40) a. 自分の部屋の目覚まし時計を止めたのに音が止まらない
マダ {ナリヨル/? ナットル}
まだ 鳴っている。
- b. どこかでサイレンがずっと鳴り続けている
マダ {ナリヨル/ナットル}
まだ 鳴っている。

あくまで比較した場合のことではあるが、九州方言の「し+をる」にも *direct evidence* の意味が見られる。

7. 古典語の推量表現

direct evidence と *indirect evidence* の区別は、古典語には見られないのだろうか。奄美方言のエビデンシャリティがどのようにして生まれたかを考える際に、古典語にエビデンシャリティを表す形式があったかどうかは、重要である。仁田他編 (2014) によると、「〈直接的エビデンシャリティー〉形式が古語に存在しないわけではなく、視覚に基づくことを表わす助辞メリ、聴覚に基づくことを表わす終止形接続の助辞ナリがある」（鈴木泰）という。

古典語には推量を表す助動詞が非常に多い（む、むず、けむ、らむ、なり、めり、らし、まし、べし）が、これらの中、「なり」「めり」「らし」は次のような意味を表すと言われる。

- (41) なり『なり』の『な』は『鳴く』『鳴す』『鳴る』のナと同語源であろう。「物が見えなくても音響が聞こえることを言う」（『岩波古語辞典』：1439）
- (42) むり「起源は、おそらく「見あり」であろう。「見」とは、動詞「見る」の連用名詞形である」「平安時代初期の『むり』の用例は、思考による推量を表すものではなく、視覚によって見えることを『...しているように見える』と表現したものが多」（同：1436）
- (43) 「らし」は「客観的に確定された事実があり、その事実が何であるか、何故であるかを推量するものである」（同：1438）

なお、「なり」「むり」の語源については、春日（1957）の次のような説もある。

- (44) 「なり」は <中略> どこまでも感覚的に実際何かの音が聞こえている表現である。<中略> 「音が... ..と聞こえる」、即ち「と」で受ける副詞を伴う「音聞こゆ」に近いものと考えたい。（春日 1957：46）
- (45) 「むり」は「みあり」の融合であると説明するよりも視覚的なメという語根にラ変の活用語尾がついたものと説明しておきたいのである。（同：48）
- (46) 「なり」は聴覚による音声の現象的表現、「むり」は視覚による対象の判断的表現の傾向が強い。（同：48）

いずれにしても、「なり」は音響が聞こえることを、「むり」は視覚による推量であることを、「らし」は事実に基づく推量であることを表していた。以下にいくつか例をあげておこう。

「なり」

- (47) 雁くればはぎは散りぬとさをしかの鳴くなる声もうらぶれにけり（万葉集 244）
- (48) 萩波の散らまく惜しみほととぎす今城の岳を鳴きて超ゆなり（万葉集 1944）
- (49) 秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ（古今集巻四 202）

「むり」

- (50) 簾の少し開きたるより黒みたるもの見ゆれば、のりたかが居たるなむりとて見も入れで（枕草子 47）
- (51) 朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なむり（竹取物語）

「らし」

- (52) 春過ぎて夏来たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山（万葉集 28）
- (53) ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたきつ瀬おとまさるなり（古今集巻 6 冬歌 319）
- (54) いつのまにうつろふ色のつきぬらんきみがさとはには春なかるらし（伊勢物語 20）

(47) では、姿が見えないが「さをしかの声」が聞こえる、(48) では「ほととぎすの声」が聞こえる、(49) では「まつ虫の声」が聞こえることを「なり」が表している。また、(50)

では「黒みたるもの見ゆ（黒っぽいもの（着物）が見えた）」を根拠として「のりたかが居たる（則隆が居た）」という推量が行われている。同じように、(51)では「朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする（私が毎朝毎晩見ている竹の中にいらっしゃる）」を根拠として「子になり給ふべき人なり」という推量が、(52)では「白たへの衣ほしたり（衣が干してある）」を根拠として「春過ぎて夏来たる」という推量が、(53)では「たきつ瀬おとまさる（滝の瀬の音が大きくなった）」を根拠として「ふる雪はかつぞけぬ」という推量が、(54)では「うつろふ色のつきぬ（あせていく花の色（あなたの恋心）が尽きてしまった）」を根拠として「きみがさとは春なかる」という推量が行われている。

注

- 1 与論方言の2種類の終止形については、山田（1977）に「現在直接の目の前において動作の進行継続を表している」、「自分（話者）の目の前にいないで、別のところで本を読んでいると推測する場合とか、目の前にいてもその時点以後の場合に「読むだろう」という推測をする時に用いられる」とある。
- 2 松本（1996）に、「メノマエ性は、モーダルにはレアルな現実にかかわり、テンス＝アスペクト的には現在の状態にかかわってあらわれるなど、いくつかの文法的なカテゴリーの複合としてなりたっている」（松本 1996:77）とある。松本（1996）のメノマエ性はエビデンシャリティに類似する概念として提示されている。

参考文献

- 春日和男（1957）「聴覚および視覚による表現（上）－「なり」と「めり」との関係について－」『文学研究』57, pp.41-57.
- 春日和男（1961）「聴覚および視覚による表現（下）－「なり」と「めり」の消長について－」『文学研究』60, pp.49-70.
- 菊秀史（2007）『与論の言葉で話そう2 動詞を覚えよう』与論民俗村
- 菊秀史（2014）『与論の言葉で話そう4 形容詞 助詞 表現意図』与論民俗村
- 工藤真由美（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて－』ひつじ書房
- 工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美（2007）「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティ」『国語と国文学』84・3, pp.53-68.
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 仁田義雄・尾上圭介・影山太郎・鈴木泰・木村新次郎・杉本武編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 服部四郎（1958）「奄美大島諸鈍方言の動詞・形容詞終止形の意義素」『言語学の方法』所収, pp.401-412.
- 松本泰丈（1973）「奄美諸島加計呂麻島諸鈍方言の動詞の語形変化おぼえがき」学習院女子短期大学『国語国文論集』2, pp.1-19.
- 松本泰丈（1995）「諸鈍方言の動詞の終止形おぼえがき」『琉球の方言』18・19 合併号, pp.164-180.
- 松本泰丈（1996）「奄美大島北部方言のメノマエ性－龍郷町瀬留」『日本語文法の諸問題－

高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房。

三石泰子 (1993) 『名瀬の方言』秋山書店

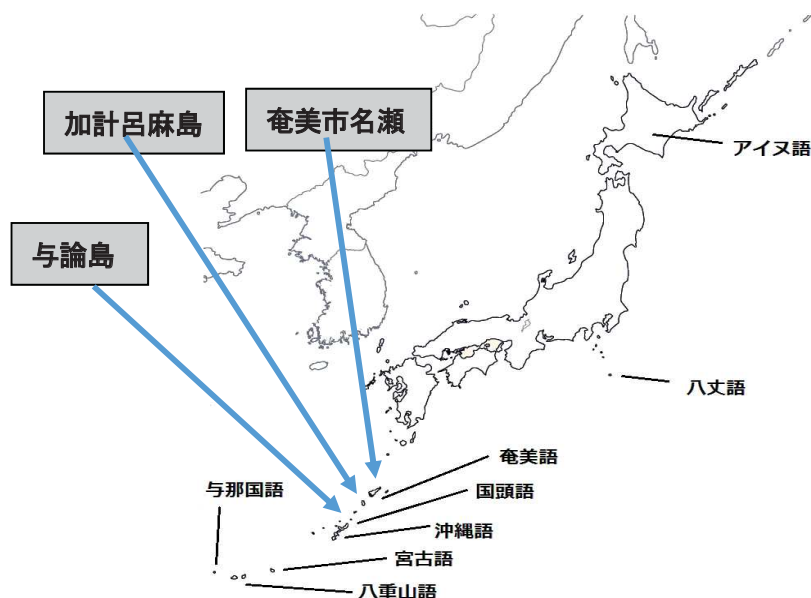
山田実 (1979) 『琉球語動詞の形態論的構造』国書刊行会

Alexandra Y. Aikhenvald (2003) "Evidentiality in typological perspective" *Studies in Evidentiality* Edited by A. Y. Aikhenvald. & R.M.W. Dixon. "Typological Studies in Language 54" John Benjamins publishing Co.

Aikhenvald Y. Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.

Delancey, Scott (1997). "Mirativity: the grammatical marking of unexpected information," *Linguistic Typology*. 1: 33–52

Ferdinand de Haan (2012) "Evidentiality and Mirativity", *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Edited by Robert I. Binnick, Online Publication.



付録図 与論島，加計呂麻島，奄美大島名瀬の位置

付記

本稿は、2018年1月25日に開催された CAAS&NINJAL 合同セミナーにおいて発表した内容をもとに作成したものである。発表の場を与えてくださった東京外国語大学国際日本学研究院に深く感謝申し上げますとともに、席上、ご質問やご意見をお寄せくださった方々に御礼申し上げます。なお、この研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の掃滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。

編集後記

木部暢子教授（国立国語研究所）

研究分野：日本方言学，音韻論，音声学

国立国語研究所（NINJAL）とのクロスアポイントメント制度により、2016年4月～2018年3月まで、東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授として在職した。その間、以下の教育研究活動を行なった。

① 大学院総合国際学研究科博士前期課程国際日本専攻の以下の科目を担当した。

- 2016 年度春学期 [科目名] Japan Studies 1
[講義題目] 日本語諸方言のアクセント
- 2016 年度秋学期 [科目名] Japan Studies 2
[講義題目] 日本の方言
- 2016 年度冬学期 [科目名] Japan Studies 2 (CAAS & NINJAL ユニット合同セミナー内)
[題目] 「日本の危機言語・方言」
- 2017 年度春学期 [科目名] Japan Studies 1
[講義題目] 方言調査法
- 2017 年度秋学期 [科目名] Japan Studies 2
[講義題目] 日本語方言の諸相
- 2017 年度冬学期 [科目名] Japan Studies 2 (CAAS & NINJAL ユニット合同セミナー内)
[題目] 「奄美・沖縄の言語研究から」

② 以下の講演会を開いた。

- 2016 年 7 月 6 日（於東京外国語大学 語学研究所 定例研究会）
題目「対格表現の地域差－助詞ゼロをめぐる－」
- 2018 年 3 月 16 日（於東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 コモンルーム）
題目「疑問文の文末音調いろいろ－日本語諸方言コーパスから－」

東京外国語大学 国際日本学研究 報告 V

Print: ISSN 2432-5708
Online: ISSN 2433-9830

木部暢子 (国立国語研究所)

Nobuko Kibe (NINJAL) in TUFSS, 2016年4月～2018年3月

発行：2019年2月28日

編集：東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 CAAS&NINJAL ユニット事務局

発行者：東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 研究院長 早津恵美子

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラ・グローバル2階 国際化拠点室

TEL 042-330-5534

FAX 042-330-5822

Email caas_admin@tufs.ac.jp

©Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Japan Studies



東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院
Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies